

と、駕籠屋は歸つて行く、權次はおさんの部屋に立寄り。

「姐公、心配することは無え、俺が明日出かけて行って委敷いことを調べて來やう。」  
切望、然うして下さんせ、出來ることなら、一日も早く牢から出してあげたいものでござんす。」

「俺もその積りだが、明日は出すまでには行くまい、旦那と俺とは切つても切れねえ仲だ、お助け申さにやおかねえから、安心して休みなせえ。」

「權次さん頼みますよ。」

權次は自個が部屋へ戻つて、うつら／＼眠りかけると、俄かに胸を壓えられて、息苦しくなつたので不圖目を覺ますと、顔色も青褪めた女が布團の上に坐つて居るその重い苦しいことは、百貫もあるかと思はれるほど、餘り苦しいので勿返さうとすれど、手足が竦むで寝反りさえも出來ない、權次は乾びついた口を漸く開けて。

「手前は何だ？」

「赤城藤九郎に怨みのあるもの、味方をすれば祟るぞよ。」

と、氷のやうな冷い手で、權次の咽喉をグツと締めた。

四七

「權次さんく。」

と、女の聲。

權次は夢心地で又出やがつかたと頭を上げて見ると、最ふ夜が明けて旭がカンカン射して居る、呼むだのはおさんであつたので、ホツと胸を卸し。

「ヤア、お早うござえす。」

と、起きあがる。

「昨夜は大層魔呻されて居なかつたが、怖い夢でも見なかつたか。」

「怖い夢ッてことは無えのですが、忌な夢を見やした。」



「然うでござんせう、わたし、何度も起こしかけたんですけど、直止めなさるか  
ら起こさなかつたのでござんす、一體怎んな夢を見なかつたの。」

「何、お話しにやならねえです、變な女が出やしてネ。」

「まあ。」

と、おさんの顔色もサラリと變つた。

權次はそれには氣も付かず。

「忌な夢を見た、めに思はず寝過ごしやした、駕籠は参りやしたかい。」

「駕籠は來ましたが、返しました……。」

「返さねえでも可いでせうに。」

「大垣行きには駕籠はお廢しなさい。」

「へー、如何いふ譯です。」

「未だ知りなさるまいが、今年の夏、半七さんが旦那の後を追ふて大垣まで行きな

さると、女が出て來て駕籠を引張つて垂井まで連れて行きました、さうして其晩半  
七さんは垂井の宿屋で女の幽靈に出會ひなかつたさうですから、駕籠で行くのはお  
廢しなさい。」

「そいつは奇體だ！」

と、前夜の夢など引合はせて見ると、藤九郎の女房の怨念に相違がないと合點がゆ  
く。

何有、白晝中に然ういふことも有るめえが、姫公の御心切、ちやあ駕籠は廢しや  
せう、岐阜と大垣、徒歩いて行ても知れた程、好うごせえす、徒歩いて行きやせ  
う。」

「子分を誰れぞ供に行りませう。」

「それにや及ばねえです、旦那のことばかりぢや無え、兄貴の敵、武部軍太夫の行  
方の手蒐りも探さにやならねえから一人の方が勝手です、事に依つたら今夜は歸ら



ねえかも知れねえから、案じねえで居て下せえ。」

「然う事が定まつて居れば案じませんが、切望、旦那を助けるやうにして下さい。」  
「好うごせえすとも氣遣へなさんな。」

と、手早く用意を調べて道中指を一本ばつこみ、裾を裏けてスタ／＼大垣へ志し城下を一廻りして當り／＼を廻ねて見ると、駕籠屋の話し通り城代家老は閉門、藤九郎は吟味中假牢とのこと、吟味が進むで白状した日には、金澤の一件、大聖寺の駕籠抜けと重なる大川で到底一命は無のもの、殊に駕籠扱とあつては金澤へ送るにしても道中の護送は一層嚴重だらう、さうなると大聖寺で行つたやうに手軽くは行かないのみならず、今度は見みとする山犬の八も水火の猪之吉も居らず、唯一人行らねばならぬのであるから、假牢とあれば盗み出すには丁度幸、本牢となつたら容易のことではない。

「さうだ吟味の進まぬうちに。」

と、權次は早速に思案を定め、とある町外れの居酒屋で夜食を済ましてドツブリと日を暮らし、時刻を圖つて奉行所の門前へと取つて返す。  
假牢とは言へ、中には火付強盗人殺等の重罪を留置くこともあるので、奉行所内の手狭な地面ではあるが、要害を堅固にして警戒も嚴重で、半時毎に見廻る撃析の音は高き練城に反響して天地の寂寞を裂いて行く、その響の絶間を伺ふて、權次は用意の細楷子をサツと高城に投げかけ、猿のやうにスル／＼と城の内へと忍び込むだ。

四八

忍び込みは忍び込むだが、大きな一棟を幾個にも仕切つた牢獄の構へであるから目指す藤九郎が何處に居るやら見當が着かないので、實の山に入りながら手を空しう歸らねばならぬかと、權次は妙からず心を痛めながら、闇を幸尙は其所此邊と



探ね廻るうち、不圖牢番の詰所の裏に出た聴くともなしに、聞ゆる牢番の言葉

「おい今度は手前の番だぜ。」

「俺あ、知つての通り性來臆病なんだ、昨夜で膽を潰しちやつた、兄弟濟まねえが代はつてくんねえ、その替り晝の事なら二人前も三人前もするからよ。」

「加なことを言ふねえ、俺だつて氣味が悪いやな、話しは聞いてるが觀たのは昨夜が始めてだ、御免だ〜。」

「开んなことは言はねえで代つてくんねえ、後生だから。」

「可いねえツてことよ、何で彼んなものが出だしやがつたかな。」

「如何でも可いやな、既子刻だ、そろ〜出る時分になつた、兄弟、頼む、代はつてくんねえ。」

「可いねえツたら可いねえ、手前も男ぢやねえか。」

「男だつて怖いものは怖いやな、兄弟、代はつてくんなきや濟まねえが、俺の番の

時だけ代り合つて二人にしてくんねえ、俺は一人では到底も廻れねえ。」  
「チョツ。」

と、舌撃一つして。

「仕様の無え野郎だな、それぢや然うでもして與らう。」

と、何心なき牢番の話しを聴いた權次は思はず北叟笑、呼吸を殺して時刻の遷るを待つて居る。

問もなく撞出す子刻の鐘の聲、牢番二人は提灯拍子木を持つて番小屋を出る、權次は送り狼で番人の後から着いて行く、番人は怖い〜と氣が先に行くので後には氣も着かず、拍子木をカチ〜鳴らして行く、行方に當つてフワリと漾ふた一團の人魂

「そら出た。」

と、拍子木の音もシトロに、逃げるが如く駈けて行く。



權次は物影に身を忍ばせて、人魂の落着く處を見定めて居ると、西側の棟のはづれから凡そ四五間位の處で止まつた、見當が着いたので。

「此處だな。」

と、獨首肯いて窺と忍び寄り。

「旦那、赤城の旦那。」

と、四邊を仰る小聲で呼ぶ。

殘蚊に責められて未だ寢もやらぬ赤城藤九郎、思ひがけなく吾名を呼ばるゝにハツとして。

「誰れぢや。」

「シート、位です、權次です。」

と、合鍵を二ツ三ツ箱めては抜き、箱めては抜き、漸とガツシリ合ふた鍵をキリ、と廻はして格子を開き。

「サア、お逃げなせえ。」

と、藤九郎の手を引摺るやうに、扉を乗超え、闇に紛れて姿を匿した。

交替した番人も二人連れ、拍子木鳴らして視巡りながら。

「兄弟、前刻鐵公が依然出たといやがつか、何にも無えぢやねえか。」

「然うよな、彼奴は臆病だからな、提灯でも見たのだらうよ。」

と。話しながら段々進つて來ると、扉になつた格子が一枚開いたまゝ、室を覗けば誰れも居ない。

「牢籠りだーッ。」

と、闇を貫く一聲に。

「それッ。」

と、奉行所詰所の諸役人、與方同心得物を取つて断付けたが後の祭り。

奉行山本但馬は鳥羽屋の身内の仕業と目をつけ、明日とも言はず、夜の内に五十



人餘りの朱房を鳥羽屋へ差向けた、けれども權次一人の仕業であつて、鳥羽屋の者は一人も知つたことではなかつたので、朱房はスゴく引擧げた。

九

薊の權次に救はれて大垣の牢獄を脱けた藤九郎は、追手を怖るゝ身の悠々と落行く先を語らふ隙も無く、大垣の城下を外れて權次は陸を東海道筋、藤九郎は楫斐川の小舟に飛び乗り流れに沿ふて川を下り、佐屋の付近で船を棄て街道を熱田に出で鳴海、有松、池鯉鮒、岡崎、赤坂、御油と足に任せて長亭短舎を打過ぎ。

「今宵は吉田に泊らう。」

と、スタく進つて來ると、杉並木の陰で女の女聲がする。

「ハテナ。」

と、聲する方に近寄ると五六人の雲助が、六十餘りの町人と二十二三の女を打圍み

「チア老耄、もう斯うなつたら適はぬ所だ、女は俺の方に貰つて行くから然う思へ。」

「モン、身ぐるみ脱げと仰有れば脱ぎも致しませう、娘ばかりはお許しなされませ。」

と、老人は遣らじと女に取着く、女は唯泣くばかり。

「るゝ聞きわけの無え老耄奴。」

と、親子を引分け、女の手を把つて引立てんとする、老人は。

「それやつては。」

と、身を藻掻けども、對手は生命知らずの荒男とて齒もたゝぬ。

それと見た藤九郎は有無を言はさず、突然女の手を把つた雲助の横面を、ボカリと鐵拳一つ食はせた。

不意を打たれて雲助共。



「一俵が商賣の邪魔する三品、疊んで仕舞へ。」

と、息杖を逆に握つて打つて蒐る。

「猪口才な。」

と、一人の息杖を奪るより早く、リュウ／＼と振廻はして、見る間に總勢を擲き伏せた。

「何所のお武家さまかは存じませぬが、危い所をお助け下され有難う存じまする。」と、老人は額を土地に摺付けんばかり。

「何の／＼、其のお禮には及び申さぬ、那點ぞお怪我はござらぬか。」

と、藤九郎は娘を劬はりながら。

「御老體で婦人連れ、何所から何所へ参らるゝ。」

「唯、わたくしは遠州濱松で質屋渡世を致しまする、濱名屋萬兵衛と申しまするもの、これなるは私の娘でお吉と申しまするが、京の御本山へ參詣の戻りがけ、赤坂

から乗りましたのが今の駕籠昇ぎ、誠に浮雲い所でござりました。」

一濱松へ歸らるゝとあらば、拙者は江戸へ志す者、能き道伴れでござる、道中が

物騒ゆる、今宵は吉田泊りと致し、明日濱松まで御同道致さう。」

「然う願はれますれば、わたくしも心強うござりまする。」

「では然やう致さう。」

と、三人連立ちて其の夜は吉田に一泊して翌日の夕景、道中恙無く濱松の城下へ着いた。

「旦那さま、誠に手狭ではござりまするが、今宵は私宅に是非ともお泊りを願ひまする、昨日の災難をお助け下されたお禮も致したうござりまするで。」

「否々、禮などは思ひも寄らぬが、孰れとも旅宿を求むる身の上、辭退致さず一夜御雑作に預からう。」

と、萬兵衛の宅へ来て見ると中々大した構へで、先づ濱松で一と言つても二とは下



るまじき富限者らしい。

主人が歸つたといふので、濱名屋は俄かに活氣立ち、殊に伴なふて歸つた侍は、娘お吉のためには生命の親といふので、萬兵衛の女房もそれへ出て来て下へも置かぬ款待、藤九郎は久し振りに氣持ちよく寛いで寐んだが、如何したにかその夜の夜半から俄かに發熱して翌朝になつても枕が上がらぬ、萬兵衛夫婦の心配は一通りではない、早速醫者を聘むで診せると、傷寒といふ診断で人參を用ゆれば請合つて全治すとの言であるから、黄金に屈托のない濱名屋のこと、醫者の言ふまゝ黄金に飽かして介抱するその真心が届いたものか、追ひ／＼快くはなるが未だ床を離れるまでにはゆかず、衰弱が酷いので、今日は明日はといふ内に其年も暮れて仕舞つた

五〇

此の濱松に、蝮の兼と綿名を取つた悪漢がある、強請もすれば詐僞もする、所謂

煮ても焼いても喰へない代物、女房お政といふは、それが爲何度身を賣つたかも知れないが、別れやうといへば突くの斬るのと恐喝するので、手を切ることも出来ず、泣きの涙で連添ふて居る。

濱名屋萬兵衛は性來發句が好きで、今日しも帳場に坐り込むで例の通り筆を片手に「鶯や」「鶯や」と、頻りに考へて居る。

番頭は苦い顔して。

「旦那さま、又發句でござりまするか。」

「うーん、如何も此の道ばかりは、番頭どんが八ヶ間敷う言ふけれど止められぬ、それにな、今度は八幡様の奉額になるので、選に入れば名が末代に残るといふものそれで斯うして考へて居るが、鶯といふ題は扱て六ヶ敷いものぢや。」

「先刻から、鶯や／＼と仰有るのは、奉額の題でござりまするか、何を仰有るや」と最前から考へて居りました、然ういふことはお部屋で爲されませ、帳場で鶯や々



々と仰有つりますと、若い者の示しにもなりませぬ。」  
『まあ然う言はしやる勿、氣の向いた時に考へぬと、好い句が出来るものぢやないし。』

と、番頭の意見も聴かず、夢中になつて考へて居る。

處へ表の障子をガラリと開けて。

『眞平御免ねえ。』

と、入つて来たのは蝮の兼。

番頭は一目見るや、悪い奴が来たとは思つたが、對手が對手だけに愛相良く。

『親方ですか、毎度御最負に有難うございます。』

蝮の兼は上り椎にドツカと腰を払え。

『番頭さん、無理かは知らねえが、これで二分貸してくんねえ。』

と、腹掛のドンブリから取り出した、銀の平打の簪一本。

番頭は簪を兎視角視、重量を引いたり彫を見たりして。

『親方、二分は酷うございます、毎度御最負に預りますから、勢一杯で一分二朱で

ございませぬ。

『番頭さん、長いことは無えのだ、二三日で好いのだ、二分頼むよ。』

『ではございませうが、何分とも世間が不景氣でございませうから、一分二朱なら手

前も大奮發でございませう。』

『然ういひなさんなつてことよ、俺の顔で貸してくんねえ。』

と、強持で尻をクルリと捲つた。

番頭は其の勢ひに怖れたものか。

『へー、ぢや、然う致しませう、又後々もございませうから。』

と、萬兵衛に向ひ。

『旦那さま、恐入りますが、お筆のつひでに、簪一本二分となすつて、質票を一札



お願い申します。」

「諾矣〜。」

と、苗兵衛はスラ〜と一枚の小票を記く、番頭は角で二分添へて蝮の兼に渡す。

「お邪魔しやした。」

と、蝮の兼はブイと出て往つた、番頭は簪を打返し眺めながら。

「これで二分は貴い物だ、對手が悪いから貸してはやつたが、流さねば可いが。」

と、澁紙に包むで符帖を付け、用筆筒の抽斗に納まふか納まはぬかに、取つて返し

た蝮の兼。

番頭は目疾く見て。

「や、入らッしやい、何ぞお忘れ物でございますか。」

「いや、今二分お借り申しやしたが、考へて見りや、活物を預けて置くのも殺生だし、こいつはお返し爲やすから、今のを戻してくんなせえ。」

と、二分の角を突出した。

番頭は呆れ顔で。

「活物と仰有りますが、今のはこれでござります。」

と、以前の簪を取出す。

蝮の兼は。

「へへへ〜。」

と、凄く笑つて。

「番頭さん巫山戯ちや良ねえ。」

五一

「何も巫山戯は致しません、たつた今此の通り、納まつた計りの此の簪。」

「おい番頭さん、いやさ番頭、俺を誰れと思つてるんだ、巫山戯た真似を爲やがつ



て、開んな簪なぞには用は無えのだ、預けた鴛を戻してくんねえ。」  
「へー、鴛？ 飛んでも無いこと、質屋の規約で汚物は一切お預り致さぬことになつて居ることは御存じの通りで、然ういふ物をお預りした覚えはござりません。」  
「おい、預らねえ物を、何故質札に記いたんだ、之れを見ねえ。」  
と、前列取つた質札を突きつけて。  
「鴛一羽、銀二分としてあるぢやねえか、此方には、斯うした確かな證據が有るんだ、戻されなけりや、出る處へ出て戻して貰はう。」  
と、早腰を挙げかける。

番頭は。

「まあ〜。」

と、引留め。

「たつた今の事、然う間違ひがあらう筈は有りませんが。」

と、帳場の萬兵衛に向ひ。

「旦那さま、今貴下は質札に何とお書きなされました。」

萬兵衛は怪訝な顔して。

「何と記けと言ひなされた。」

「驚きましたな、簪一本銀二分とお願ひ申しましたが。」

「開んなら然う書いたぢやろ。」

「それが然うで無いやうでござります、お聞きの通りたつた今此の簪で二分御用立て申しましたら、二分は不用になつたから、鴛を返せと斯う言はれますので困つて居ります。」

「簪を預つて鴛を返すといふ法は無い、何かの間違ひぢやないか。」

「間違ひとは存じますが、質札に鴛と記いて有りますさうで、是非鴛を戻せと斯う言はれます。」



「たつた今預けたんだ、四の五の言はねえで戻してくんねえ、おい其處の隠居、手前が現在記えたぢやねえか。」

と、突着けられたのを見ると、成程自分で鴛と書いてあるので萬兵衛は愕然して。

「これは親分、誠に申譯がござりませぬ、放膽、發句に夢中になつて居りましたので、鴛と書いたと見えまする、これは全くわたくしの粗勿、親分、何でござりませう、鴛をお返し致しませうにも宅には飼ふた鴛もござりませぬので、別に致し方もござりませんが、鴛の代金で御内濟には成りますまいか。」

「何だ、鴛が無い、それぢや手前の内で殺しやがつたんだな、諾矣、殺したとありや仕方がない、代金で我慢してやらう。」

「凡そ代金は幾許でございませう。」

「さうよな、百兩に負けて措かう。」

「へッ、百兩！」

と、番頭は愕いて飛びあがる。

「此方にや預けた證據が有るんだ、否と言やめ、出る所へ出るまでだ、早く返辭を爲ねえ。」

「番頭どんや、俺が一生の誤りぢや、百兩出して與けておくれ。」

「でも貴下、見すく知れた言ひがゝり。」

「何だと。」

と、蠅の兼は腕を捲つて偉い權幕。

「まあ、何にも言はずと、出してお與げ。」

番頭は主人の命令、不承くに金庫から小判で百兩取出して。

「どうか、請取つて下さい。」

と、蠅の兼の前におく、蠅の兼は莞爾笑つて。

「へへー、飛んだお邪魔を致しやした。」



と、小判を改めて悠々と引擧げた。

旦那さま、日頃から申さぬことではござりませぬ、發句に凝るのも程度くになされませ。」

「番頭どんや、面日無うて、俺は何とも言ひやうがない。」

暖簾の蔭で聽いて居た藤九郎、ツカ〜と店へ出て。

「憎い奴でござるの。」

と、蚊の鼻を見送つた。

五二

誰いふとも無く濱名屋の家の棟に、子刻過ぎになると人魂が出るとの世評が立つた、萬兵衛の驚きは一方では無い、正月早々には發句に凝つたばかりに百兩強請られた上に、延喜でも無い人魂が出るなどとは何といふことであらうかと、それを氣

にした擧句ドツと重い枕に就いた、藤九郎は、然ういふ世評を聞くにつけ、お澤の怨靈が未だ付纏ふて居ると自覺するので、早く此地を立退きたいとは思ふが、濱名屋親子が生命の邊と言ふて、何時までも逗留してくれと引留めもするし、自分の健康も熱病以來一向に恢復せぬので、引留められるまゝに半年餘りの長逗留になつた今日は二月の初めの巳の日、梅の花もちらほら咲初めて、辨天島の辨天は賑はうと聞き、脚試しに参詣しやうと身輕に出立ち、舞坂から渡船に乗つて辨天島に来て見ると思ひの外の雑沓、茶屋の床几に打掛けて濱名の湖水の風景を眺め、南は茫茫たる水や空なる遠州洋の壯觀を愛して、時遷るまで我れを忘れて居たが、餘り暇取つては萬兵衛が氣はんと、床几を離れて辨天の社を一廻りして、更に濱名湖の景色を眺めて居ると、拜殿の横手に一叢茂れる雜木の蔭で、今や身を跳らして湖水に投せんとする女がある。

藤九郎は駭寄つて襟際をムツと取り。



「女中、早まる勿し」

と、引留める。

女は決死の勢ひで。

「切望、放して下されませ、死なねばならぬ譯がござりまする。」

「その譯聽かう、その譯を聽くまでは、滅多に放すことでは無い。」

と、引戻す、

引戻されて女はカッパと伏し。

「お留め下さるは忝うござりますが、生きて居たとて何樂みも無い此の體、切望

お慈悲に死なせて下されませ。」

「知らぬ内なら兎も角も、斯く引留めた上からは、見すく死なす譯にはならぬ、

死なねばならぬ譯を言はれよ。」

「唯、忝うござりまする。」

と、女は顔を上げる、見ると年は三十左右の姫櫻ながら、色香は残る白粉焼けにも素人とは請取れぬ物腰格形。

「お耻づかしい話しでござりますが、妾はおまこと申しますもの、良人は蝮の

兼といふ落破戸、悪事にかけては抜目なく、強請詐偽を稼業のやうに爲る計りか、

妾の體を諸所方々に賣り飛ばし、身の代金を賭博の資本、資本が盡きると足抜きさ

せて、二度も三度も辛い勤めを爲せませ、此の頃聞けば、妾が以前奉公して大恩

のある濱名屋さんまで、百兩といふ黄金を強請りましたとやら、その黄金も賭博で

取られ、苦しい紛れに又もや妾に吉田を賣るとの相談、此の年をして何で勤めがな

りませう、辛い勤めを爲る程なら、死んだが勝と覺悟したのでござりまする。」

「成程の、悪い亭主を持ったが不仕合せ、とは言へ長い浮世に短い生命、自から縮

めるにも及ぶまい、憎きは蝮の兼とやら、活けおいては他人の迷惑、一殺多生とは

佛の教へ、其方の爲には良人なれど、活かしてはおかれぬ奴、打取つても恨みはあ



るまい。』

「お禮こそ申します、何んでお恨み申しませう、彼程までの悪黨とは露知らず、娘心のいたづらから、膚を觸れたが口惜しうござります。』

「ふん、その覺悟なら明日とも言はず、其方の苦痛を除いて得さす。』

「それは誠にござりまするか。』

「拙者も武士ぢや、二言はないわ。』

「若し然ういふことになりませうなら、妾が助かる許りではござりませぬ、世間の他人が幾許喜ぶか知れませぬ。』

「心配致す勿。』

五三

藤九郎は、蝮の兼の女房おまさくに手引をさせて、斬つて棄てんとお政を引連れ、

辨天島から又もや渡船で舞坂へ上り、舞坂の驛を離れて街道にかゝると、血眼になつてお政の行方を捜して来た蝮の兼とハツタリ出合ふ。

「其方は、過般濱名屋を強請つた蝮の兼とやら。』

聲かけられて兼は愕然したが、流石は悪黨微懼ともせず。

「巫山戯やがんな駄三品、強請とは何の事だ、見りやあ俺の女房を拉れて、汝は間夫だな。』

「無禮申す勿。』

「重ねて置いて四ツといふ所だが、間夫代で我慢してやる、キリ／＼金を出しやがれ。』

望みとあらば金を遣はす、美事請取れツ。』

と、長い刀をスラリと抜く。

「汝ッ、抜きやがつたな。』



と、道中指を抜くが早いか、藤九郎目菟けて斬つてかゝる。

「何の」

と、藤九郎あしらひながら、隙を規つて片手殿りに腰の付根をサツと斬る。

「アツ」

と、倒れる所を首打ちおとし、その儘舞坂の本陣へと取つて返し、お政を證人として無禮打といふ届けをした。

蝮と呼ばれる悪黨のことであるから、無禮打とあれば別段の咎めもなく、宿場の役人から

「追つての沙汰を相待つべし。」

と、ばかりで、藤九郎は無事に濱名屋へ引取つた。

蝮の兼が斬られたと言ふので、従来、苦しめられて居た濱松の町人は、厄病神を送り出したやうに喜むで、藤九郎を神さまと尊び。

「濱名屋の客人は偉い人ぢや。」

と、賞讃へ。

「これから安堵して商賣も出来る。」

と、て傳手を求めて藤九郎に禮心で贈物する者もあるといふ大人氣。

藤九郎の人氣の好いに就けて、萬兵衛は一日女房を側近う呼寄せ。

「媼さんや、俺は今度は逆も助かる見込みは無いから、一日も早う如來さまのお側に参りたいと思ふて居るが、それに就いて心残りなのはお吉のことぢや、二度までも婿を取つたに、一人は不縁で一人は死訣れ、二十三四で後家でも措かれず、出来ることなら、彼のお侍さんに婿になつて貰ふ譯にはなるまいかの、然うなれば俺も安心して成佛が出来るがな。」

「お侍さんなら町内の評判も良し、お吉にも異存はあるまいが、何をいふてもお侍のことぢやから、町人の婿にはなつて下さるまい。」



「さあ、其點ぢやて、俺が末期の願ひぢやとお頼みしたら、此の身代を皆お與げするのぢやから、失禮ながら御浪人のこと、諾と仰有るかも知れぬと思ふ、一ツお前から頼むで見てくださいぬか、強つて否と仰有れば仕方が無い、それまでと斷念めるがお吉も可哀相ぢやしの。」

「然うでござんすな、當つて壊けるといふこともあるから、如何なるか知れぬけれど、お頼みして見ませうわいな。」

「それが何よりの冥土への土産ぢや、南無阿彌陀佛く。」

「二人で好いと思ふても、娘が何といふやら、先娘の腹を訊いて見ませう。」

と、女房は娘の部屋へ来て見ると、日當りの好い椽先でお吉は一心に縫物をして居る。

「母さん、何ぞ用でござんすかえ。」  
女房は娘の側に坐つて。

「他の用でも無けれど、今親爺どんの言はしやるには、お前を斯うして何時迄も一人では置かれぬゆへ、彼のお侍さんを婿になつて貰ふたらと言はしやるが、お前に否やは有るまいかと案じてな。」

「まあ、母さんとしたことが、妾のやうな賦の悪い者は何人婿を貰ふても、無駄なことと思ひますゆゑ、そのことは措いて下さんせ。」

五四

「二人も貰ふた婿が如彼なつたことぢやから、然う思やるも無理では無いが、親爺どのを安心するため、お前承知をしておくれ。」

「もふ妾は生涯獨身で暮らす積り、母さん、このことは斷念めて下さんせ。」

「それでは彼のお侍さんが氣に入らぬのかえ。」

「何んのまあ、然ういふ我儘ではござんせぬが、賦の悪い妾のことゆゑ、又怎んな



ことが有らうかと案じられます。」

「それは取越苦勞といふものぢや、お侍さんが氣に入らぬのでなければ、何も親孝行と思ふて諾と言や、親爺どのも何様に嬉ばしやるか知れぬ、な、好えかや。」

「爺さんが安心すると言はしやんすなら、妾は如何でも好ござんすけれど……」

「それで好い、親孝行と思ふて納得しておくれ。」

と、女房はいそぐ藤九郎の居間へ来て見ると、藤九郎は頻りに打粉を打つて刀の手入れ。

「旦那さま、御精が出ますな。」

「これは御内儀、能く見えられました。」

と、坐に請じる、女房は慇懃に。

「甚だ卒爾なことを伺ひますが、貴下は奥さまはお有でござりまするかえ。」

「これは又異なお訊ね、四五年以前迎へは致したが、昨年死去致しそれ以來浪々の

身の上、耻かしながら無妻でござる。」

「それを伺ひまして一ツの安心、と申しまするは、甚だ申上げかねた譯でござりま

するが、御存じの娘お吉、今年二十四に相成りまする、二度まで婿を迎へましたな

れど縁が無く、彼の通り獨身で居りまする、何の道好い婿を取つて此の身代を繼が

せねばなりません。」

「なるほどの。」

と、藤九郎は空吹く風。

「それに就きまして親爺殿の申しまするには、吉田の驛で危い所を助けられたのも

何彼の因縁であらうほどに、旦那さまにお願ひ申して、不束な娘ではござりまする

が、不便なものと思召し、婿になつて戴く譯には成りますまいか、と折入つてのお

願ひでござりまする。」

「これは又意外の仰せ、長々御厄介に相成りし御當家のことでござれば、餘の儀な



らば否やは申さぬが、此の儀は平に御容赦に預り度い。」

「でござりませうとは重々お察しは致して参りましたが、お侍さまに町人の婿になり下されと申しまするは、全く量簡違ひと思召しませうなれど、能くお聴き下されませ、親爺殿は迎も今度は助からぬ、娘の婿さへ定まれば安心して成佛が出来るその婿といふては是非とも旦那さまに御承知が願ひしたい、末期の頼みは是れ一つと、斯様に申しまするで、旦那さま、無理なお願ひではござりませう、御迷惑でもござりませうが、明日をも知れぬ親爺殿を安心すため、切望、御承知下されませ。」

と、思ひ込む話し振りは勿論戯談では無いらしい。

藤九郎は熟々考へる、今から仕官の道を求めた所で何時出世することやら測知られず、折角大垣で仕官しやうとすれば、お澤の怨霊のために大事な場席で思はぬ狼藉、お澤の怨みの散れぬ間は、或は仕官は出来ぬかも知れず、それならば断念兩刀

を捨て、仕舞つた方が安全かも知れぬ、と思ひ到ると、此の縁談を承諾すれば萬兵衛への恩返しにもなる譯と自問自答で心も定まり。

「それほど迄に御懇望とあらば、否み申すも勝手ケ間敷い、してお吉どの合點でござるか。」

「唯、彼女は疾に得心致して居りまする。」

と、茲に首尾克く縁談は纏まつた。

五五

濱名屋萬兵衛は藤九郎とお吉との縁談が纏まつたので安心したのか、それから二三日すると穏かな往生を遂げた、これがため、濱名屋の家の棟に出る人魂は萬兵衛の死ぬ兆で有つたかとの世評も立ち、葬式が済むでからも、萬兵衛があれだけの身上を残して逝つたから、迷ふて出るのだらうとの臆説で、人魂に就いて藤九郎を



怪むものは無かつた。

四十九日も過ぎたので改めて中人を頼むで、藤九郎とお吉と晴れの祝言をするこ  
とになり、四海波静かに祝宴もお開きとなつて、花嫁花婿は奥座敷の八疊敷に六曲  
屏風を廻らして寝物語りも睦まじく、一寝入りした藤九郎が不圖眼を覺ますと、行  
燈の蔭にボンヤリ座つて居るのは紛れも無いお澤の姿、頬から肩へ血塗れになつて  
怨めしやとばかりハツタと藤九郎を睨むだ眼は火と輝いて居る、町人の婿とはなつ  
ても昔忘れぬ枕刀、取るより早く。

『汝ッ。』

と、拔撃ちにバツサリ斬ると行燈が真二つ、バツと紙に移つた火はポロ／＼と燃え  
ると見る間に、屏風、襖、天井と燃え擴がるその早さ、瞬く裡に家根を吹抜き忽ち  
母屋へ遷つて、夜明方にはさしもの大きな建物も柱一本残さず灰になつて仕舞つた  
不思議なことには濱名屋一軒焼けた限りで、軒並びの兩隣は庇も焦さなかつたこと

である

住宅は本より土藏を三棟も落したので、質物は残らず肝腎な臺帳まで焼いて仕舞  
つたため、貸金は取れず、金目の物は焼けて失くなる、濱名屋の家族は一足飛びに  
箸片端有たぬ乞食同様の境遇に陥つた。

藤九郎は正しくお澤の祟りと悟つたので、長居をしては如何なる事から身の破滅  
になるかも知れぬ、と氣が注くと其の儘火災の混雜に紛れて濱松を後に、東海道を  
足の向くまゝ江戸へと志ざした。

渡船を渡れば。

『お連れのもの。』

と、二人前取られる、旅宿に着けば膳を二人前就けられる、寢床を見ると枕が二つ  
並べられる、何所までも二人連れの旅行と見られるので、藤九郎は心の中にお澤の  
靈魂が付纏ふて居るとは察したが、血氣盛りの剛膽な男であるから、別段それを氣



にも留めず、思ひ出した折念佛の二三度も唱へる位のこと、街道筋を泊り重ねて箱根の山も無事に超え、小田原、大磯、平塚の驛を過ぎて馬入川の邊に来ると、一人の千個寺参りが倒れて居る、時は六月の炎天で焼付くやうな日盛りのこと、暑にでも中てられたものか、顔は紅を塗つたやうに赤くなつて頻りに呻つて居る、藤九郎は駈寄つて印籠から薬を取り出し、噛み砕いて口中に入れ、川水を注いで頭から顔を冷して與ると、千個寺参りは漸く正氣付いた。

「確り致せ、何處の者かは存せぬが、拙者が介抱致してとらす、氣を確乎に持て。」

「唯、有知うござります、お庇さまで助かりました。」

「して、其方は孰れのものぢや、見れば二十歳になるやならずで此の風體、心願の筋でもあるのか。」

「唯、わたくしは越前金津の者でござります、些と尋ねる者がござりまするので斯やうな姿で廻國致して居ります。」

越前金津と聴くと、突嗟に薊の權次を思ひ出すほど、藤九郎の胸には覺へがあるので、キツと千個寺参りの顔を視詰め。

「越前といへば長い道中、此の炎天を難澁であらう、その尋ねるといふは親か兄弟か、又其方の名は何と申す。」

千個寺参りは藤九郎を見上げ見おろし。

「わたくしは、紀の國屋伊兵衛と申す者の忰伊之助と申すものでござります、尋ねる者は仔細有つて申されませぬ。」

五六

これまで聴けば藤九郎は充分悟めたので。

「仔細ありとならば推しては聞はぬが、これより江戸へ下るか、それとも京阪へ上ると申すか。」



「唯、江戸へ下ります積りで、此處まで参りますると、測らず御厄介に成りました、此の御恩は決して忘れは致しません。」

「何のく、恩なぞとは思ひも寄らぬ、この容體では一人旅行は相成るまい、諾矣く、拙者も江戸へ参る道中、同道致して遣はさう。」

「誠に御心切 忝う存じまする、然う願はれますれば、わたくしも仕合はせに存じまする。」

と、伊之助は地獄で佛に會ふた心地で、藤九郎に助けられて馬入川を越え、その日は早泊りとして藤澤に一夜を明かし、戸塚、程ヶ谷、神奈川、川崎と、驛々を二人連れて品川に着いたのは三日目の夕方であつた。

「伊之助、此處までは同道致したが、拙者とても浪々の身の上、この上召連れる譯には相成らん、縁が有らば重ねて會ふと致して一先此處にて別れることに致さう。」

「唯、段々との御世話に預かりまして、お禮の申上やうもござりませぬ、此の儘お

別れ致しまするは残り惜うござりまするが、仰せに随ひましてお別れ致しませう、御縁がござりましたら、必ずお禮に伺ひまする、一足お先へ御免下されませ。」

と、江戸を指して急ぎゆく。

一足おくれて藤九郎は、志す江戸へ着いたものゝ、これといふ目的も無いので暫らく時節を待たうと、下谷は根津権現の傍に小さき一軒を借受け、表には尺八指南の標を出し、物日賽日には虚無僧姿で、根津の遊廓から吉原其の外、目貫の場所を尺八鳴らして風流に日を送つてゐる。

伊之助は江戸に入つて後、或桂庵の周旋で仲間奉公に入つた、それは、淺草馬道で町道場を開いて居る眞庭軍刀齋といふ劍術使の屋敷。

薊の権次が四人の子分を連れて、越前金津の紀の國屋に押入つた時は、伊之助は十七歳の小供上りであつたが、町人ながらも親の敵が討ちたいとて、母親首め親戚番頭等の留めるのも聽入れず、聽然宅を飛び出して、先づ京阪を隈無く搜したが手



掛りが無いので方角を變へ、東海道を幾難難して藤九郎と共に江戸に來たのは、それから三年目であつた、目的が敵討ちであるから、劍客の屋敷と聽いては偶には一手二手の指南も受けたいとの希望もあるので、働き振日も普通の奉公人とは異なり年期給金などは頭に置かず、陰陽なく勤務大事と立働、軍刀齋も亦普通の仲間と見えぬ忠實な振舞に目を付けて、一日、伊之助を近く呼び寄せ、

「其方の働き振りを見るに、年期奉公の仲間には似合はぬ忠勤、何か望みでもありはせぬか……如何ぢや、差支へ無くば包ます語れ、次第に依つては、力になつて遣はすまいものでもない。」

と、意味有り氣。

「有難う存じまする、御心切なお訊ねでござりまするゆる包ますお話しまする、實はわたくしは親の敵が討ちたいと存じまして。」

と、之を端緒に薊の權次のために親を殺され、黄金を盗まれたこと等委細に物語る

「その賊は薊の權次といふに相違無いか。」

「別に證據といふてはござりませぬが、其夜、母もわたくしも手傷を負はされたので、能く顔形を見覚えて居りまする。」

「見覚えがあれば又工風も有らう、併し敵討は公儀の御法度であるから、公然討取る譯にも相成るまい。」

と、軍刀齋は首を捻つた。

五七

軍刀齋は更に語を續ぎ。

「それは兎も角、先第一に心得置くべきは劍術ぢや、敵に出會ふとも、劍術の心得が無うては致し方もあるまい、明日より指南致して遣はさう。」

「誠に有難う存じまする、一生懸命に修行仕りませう。」



と、それから伊之助は、主人の用事の際々には晝夜を分たず、専ら精神を委ねて  
劍術を勵み、軍刀齋も又その熱心を賞て、手を取るばかりに仕込むでは見たが、町  
人育ちで二十歳近くなつて始めての修行であるから、熱心な割合ひに伎が進まず、  
物に成るかと思ふんで屢々匙を投げかけたが、その熱心を特徴にして、毎日稽古を  
爲せて居る内、早くも三年を経て、安政六年改元あつて萬延元年とはなつた。  
紅葉も色着く秋の末のこと、一日、軍刀齋は品川の御殿山に紅葉を見んとて、伊  
之助を供につれ、一瓢を携へて御殿山へと登つて来る、春は北の飛鳥山の櫻、秋は  
南の御殿山の紅葉と春秋の兩大關に數へらるゝ名勝のことゝて、満山の紅葉は蜀紅  
の錦を以て蓋へる如く、脚下には青波萬里に連なる品川灣、雲の絶間に青く見ゆる  
は房總の山々、波間を徠徠眞帆片帆を一瞬の下に納むる光景は、詩人の所謂活圖  
畫である。

軍刀齋は、とある茶屋の床几に腰を卸し、此の風景を心ゆくまで眺めながら、さ

も娛し氣に瓢の酒を傾ける、と、四五間離れた向ふの床几に腰をかけた三人連の町  
人體の男があつて、何か密々話しては頻りに軍刀齋の頭から足の爪先まで視つめて  
居る、軍刀齋は不圖それに氣が着いて、變な奴だと思ひながら、時々三人の方を視  
ると、三人は急に瞳を外す、その瞳を外すのが軍刀齋の視る度に明かに判るので、  
軍刀齋は尠からず不快を感じたらしく、俄かに床几を起つて。

「伊之助參れ。」

と、ドン／＼急歩で山を下つた。

後を振り反ると、その中の一人が見え隠れに芝の宇田川橋まで尾けて來たので、  
軍刀齋は辻駕籠を雇ひ。

「伊之助、其方は先へ還れ、身共は今夜歸宅致さぬかも相知れぬ。」  
と、駕籠の垂を卸すや否や、北へ／＼と急がせる。

見返り柳に招かれて、たら／＼下る衣紋坂、大門潜れば仲之町、櫻は無けれど花



と輝く樓々の燈火は晝を欺いて、囃し立つる管絃の音には歌舞の菩薩も浮かればかり。

途中で駕籠を捨てた真庭軍刀齋は、麻裯草履の運びも軽く、通ひ馴れたる揚屋町の朝日大黒の格子先で、張店の中頃に居る華魁綾衣の顔を瞥と見るや、そのまゝドク／＼と二階へ登る、綾衣は飛立つて、襦袢の袂を取る手遅しと軍刀齋の後を追ふ『好く来なりました。』

と、馴染甲斐に馴れ／＼しい。

例の通り淡泊濟まして、部屋に通つた軍刀齋は、何時に無く浮かぬ顔、綾衣は心配らしく摺り寄つて。

『主え、如何か爲なりましたの。』

『如何も致さぬが、今日御殿山へ紅葉見に往て怪しからん奴に出會ひ、酷い興を褪まされた、それがため些か心地が悪いのぢや。』

『何ぞ、間違ひでもありませんしたか。』

『いや／＼、氣遣ふことは無い、決して心配してくりやる勿。』

と、話しの中央を長廊下通ひ、足音盗むで障子越しに室内の容子を伺ふて居るのは綾衣の姉女郎七越である。

五八

真庭軍刀齋は、その翌朝の巳刻時分、微醉機嫌で戻つて来た、機嫌はたしかに微酔であるが、平素に似ず何と無く調子が沈むで居るやうで、稽古場ではボン／＼竹刀の音が爲て居るけれども、自分で稽古を付けるでもなく、居間に通つたまゝ煙草を燻らしては、何やら考へて居るらしい。

伊之助は次の間から手を突いて。

『お歸りなさいまし。』



「うん、今戻つた、昨夜變つたことは無かつたか。」

「はい、別に變りはありませんが、わたくしがお邸に歸りますまで、怪しい男が尾いて參つたやうでござります。」

「然うか、別には無いの。」

「別には何にもござりませんが、旦那さま……」

と、四圍を一應見廻はして。

「昨日、御殿山で日頃探ねる薊の權次を見付けました。」

「何？ 薊の權次を見付た。」

「旦那さまのお掛けなされました床几から、四五間向ふの床几に腰を掛けて居りました三人連の、中の一人は確かに相違ござりませぬ。」

「ふうん、然うであつたか、それならそれと、彼の場で申さば、能く見届けて遣はすものを。」

「わたくしも、然うは存じましたが、向ふが餘りをわたくしをみますゆる、若しわたくしの顔を見覺えて居て反討ちにでもする量簡で、能く視るのではないかと存じましたから、顔を匿して控えて居りました。」

「然うであつたか、彼の三人が餘り身共を見るゆる不快を感じたが、さては其方を視たのであつたか、愈々權次と定まらば、一應町奉公へ届けねば相成らぬ。」

と、一寸考へて。

「今日より其方に隙を遣はすから、江戸中探して彼れの居所を突留めて參れ。」

「有難うございますが、若し此の事をお上にお届け致しますと、お上で御所刑になりまして、わたくしが討つ譯には成りますまい。」

「先日申した通り敵討は御法度であるから、何れ然うなるかも測られぬが、それは如何でも好いとして、先づ居所を突止めるが第一番、只今から探しに參れ。」

「畏まりました、わたくしの爲には親の敵、屹乎居處を突留めて參ります。」



と、立たんとするを呼留めて。

「待て、能く其方に申聽けておくが、假令、途中で出會ふとも、必ず敵呼ばはり致す勿、と申すは其方の伎倆にては眞劍勝負など思ひも寄らず、身共が付添ひ居らば助太刀致して討つて取らすが、必ず、自分で手を下さうなどと無分別な事を致す勿よ。」

と、平素に無く濕つた調子、聽いて居る伊之助も何だか引入られる氣持で、唯。

「ハイ、ハイ。」

と、ばかり悄悄々として勝手へ退つた。

眞庭軍刀齋は、前日御殿山の紅葉觀で、伊之助が權次といふ三人連の男に、凝々と吾が相格を視られたり、又後を尾けられたりしたので、胸中に一團の結ばれが出来て、何としても其の結ばれが解けかねる、それも道理、眞庭軍刀齋とは世を忍ぶ假の名、誠は三年前岐阜に於て烏羽屋半七を撃つて立退いた武部軍太夫である。

「三人連の注意深い眼光は、決して伊之助を見たのでは無い、吾が容貌を視入つて居た、若しや烏羽屋の子分共ではあるまいか、然うであつて見ると、現在の住家まで知られた以上、決して油断はならぬわい。」

と、それからそれへ杞憂を廻すと、氣も心もクシャ／＼するので。

「酒だく。」

五九

伊之助は主人軍刀齋の許しがあるので、朝餉を仕舞ふて編笠で面體を匿し、秋は末でも天氣は好し上野淺草は不相變の人出であるから、今日も亦淺草觀世音から上野の山内を不忍へと下りて見たが、それぞと思ふ影も無い、時しも本郷の團子坂は今や菊の眞盛り、事に依つたら紛れ込むで居るかも知れぬと、池の端から根津を抜



けて團子坂へかゝつた。

未刻時分の日は輝いて、膚には薄い汗をさえ覚える好い季候であるから意外の人出で、建列べた菊人形の幟の色も景氣好く、數多の群集の中を採まれくて、坂を下つて來た侍は主人の軍刀齋、酷く酒に酔ふて居るらしく、一步は高く一步は低き千鳥足、連れはと見ると、遊女が一人仲居らしいのが二人後から尾いてゐる、とある觀物小屋に入つたので、伊之助も編笠を被つた儘續いて入ると、中は大江山とか仲之町の鞆當とか、安宅の關とか、歌舞伎役者の似顔で衣裳は總べて菊細工、越前から出て來て始めて觀た伊之助は、珍らしさに我れを忘れて視て居たが、鞆當の留衣の人形の顔が、國に居る姉のお谷に生寫しなので、其の場を去らず飽かず眺めて居ると、女の聲で。

「この留女の顔は綾衣さんそっくり。」

と、いふその言葉に續いて。

「然うだ〜。」

と、いふは確かに軍刀齋、續いて。

「知りません。」

と、拗ねたらしくいふたのは遊女の聲であつた。

伊之助は不圖考へた、人形の顔が姉に似て居る、姉に似て居る人形の顔が、軍刀齋の連れた遊女の顔に似て居るとすると、その遊女は若しや姉ではあるまいか、斯う考へると何は措いても前に居る遊女の顔が見たくて耐らぬので、見物人を推分けて前に出抜け、次の安宅の關の人形の處で待つて居ると、推され〜て出て來た軍刀齋に續いて來たのが、綾衣さんと言はれた遊女、伊之助は編笠越しに能く視ると疑ひもない姉のお谷であつたので。

「姉さん。」

と、飛着きたい程に思つたが、群集の中ではあり、殊に軍刀齋が居るので、逸る心



を鎮と推へて見失はじと、その後から尾いて行く。

軍刀齋は仲間伊之助が尾けて居るとは夢にも知らず、そこを出てから二個所の人形を觀て、再び坂へと取つて返し藪蕎麥で一杯傾け、駒込坂下町から鴛籠四挺で、谷中の天王寺を横に上根岸を金杉へと抜け、龍泉寺から日本堤に出て吉原揚屋町朝日大黒へ歸つて來た、尾けて來た伊之助は之れで可しと引返す道々も、綾衣と朝日大黒とを幾度も繰り返して、馬道の軍刀齋の屋敷へ還つた。

夜食もそこ／＼に自個が部屋へ坐つたまゝ、綾衣が實際姉であつたら、國元は怎んなことになつて居るかも知れぬ、呉服店が張つて行けなくなつたのか知ら、然うで有つたら母は怎うして居るか知ら、杯と考へると考へるほど一時も早く綾衣に逢つて見たい、姉であつたら知らず國元の容子が聴きたいものと、心は千々に逸れども仲間奉公の身分では、客となつて會ふ譯にもゆかず、唯顔が似て居るだけで、名告り合つた上で無ければ、弟と名告つて行く譯にもならず、如何したものかと案じ

ながら、夜の更けるまで軍刀齋の還りを待ちつゝ、眠りもせず腕を拱み首を捻つては、綾衣に會へる工風を凝らして見たが、是れといふ名案も浮ばぬまゝ枕に就いた軍刀齋は例の通り、遂にその夜も歸つて來なかつた。

六〇

綾衣は後歸りの客を送り出し、風呂を濟して鏡臺の前で髪を梳付けて居ると、喜助といふ朝日大黒の若衆が、草履の儘廊下に踞むで。

「華魁え、お國の人だつて、貴姐に逢はせてくれと言つて、店に來てますが如何します。」

「國の人？」

と、綾衣は一寸考へる。

「二十左右の不意氣な仲間さんです。」



二十左右と聞いたので綾衣は心に當つたか。

「誰れか知りませんが、國の人といへば懐かしい、内證に斷つて此處に通してくん  
なまし。」

「畏まりました。」

と、喜助はトン／＼段梯子を降りてゆく、綾衣は髪の手入れを切上げて、付近を取  
形付ける間も無く、喜助に連れられて來たのは、頭は撥鬢に剃下げてはゐるが、  
忘れもせぬ弟の伊之助であつた。

伊之助は進められた座蒲團を押退けて。

「貴姐は姉さんちやござんせんか。」

「伊之さん、暫らくでありんした。」

「おう、依然姉さん、怎うして斯んな處へ………これには仔細が有りませう、聽か  
せて下さい。」

と、膝を乗り出す。

綾衣は語るに先だち熱い涙を泣然流して。

「伊之さん、一通り聽いてくんまし、知つての通り二千兩といふ黄金を奪られた  
上に、父さんは非業の御最後、母さんの其夜の怪我、は治ることは治つたけれど、  
その年の冬から痛み出して長の病ひ、二千兩の黄金のために西陣への仕切りが出來  
ず、到頭店は閉むで仕舞ひました。」

「ゑッ、あの店を閉みましたか。」  
と、愕く。

「そればかりではありません、一番頭の傳兵衛が、落日と見て善うないことを企ら  
むで、大分宅の物を誤魔化したとやら、それやこれやで母さんの病氣は重る一方、  
斯うして居ても明暮氣に懸つてなりいんせん。」

「それぢや、母さんの病氣のために身を賣つたのですか。」



「母さんの病氣のためばかりでもありませんが、僅か三百兩に手詰まつて……其方でも居さんしたら、又相談も有つたかなれど、其方の行方は知れはせず。母さんの心配は大體ではありんせぬ。」

「済まぬことを致しました、併し姉さんお喜びなさい、敵は江戸に居りまする。」

「何、敵が江戸に居ますかえ。」

「前月の末、旦那のお伴で御殿山の紅葉観に行た折、確かに権次を見付けました。」

「権次！」

と、綾衣は暫らく考へて居たが。

「権次と言へば、姉女郎さん、七越さんのお客も権次。」

「ゑッ、権次が此處へ來ますかえ。」

「其方が見たと言やる故、然うではないかと思へども、同じ名前は數あること。」

「それもさうですが、姉さんも氣をつけて、豫ねて話した人相に相違が無ければ、

馬道の屋敷まで報せて下さい。」

「馬道の屋敷とはえ。」

「昨日、團子坂の菊人形に連れて行かれた、眞庭軍刀藏さまのお屋敷。」

「そんなら、其方は眞庭さんに奉公して居なんすか。」

「ゑえ、今年で足かけ三年勤めて居ります、敵が知れたら助太刀して、討たせて與ると仰有ります。」

「それは好い處へ奉公しやんした、然ういふことなら今宵にも、七越さんの處へ來たら、屹乎吉左右知らせやしせう。」

六一

伊之助は久し振りに姉のお谷に邂逅ひ、積る話しに時を移して尋ねる権次の吉左右を報すとの手筈も出來たので氣も何となく勇みたち、屋敷へ歸つて夕暮の掃除す



るさへ景氣好く、門人の歸つた後の道場を形付けて居ると、玄關に。

「御免ねえ。」

と、案内を乞ふ聲。

「どうれ。」

と、箒片手に出て見ると、縞の羽折に一本指した町人が立つて居る、加之、過般、御殿山で見かけた三人連れの中の一人、伊之助は愕然したが、然あらぬ體で。

「何處からお出でなされました。」

「何處からでも好うごせえす、先生にお目にかゝりや判ること。」

對手の容子が怪しいので、留守と言ふて追返さんと。

「折角のお出ですが、先生は……」

「留守とは言はせねえ、夜明けぬ内から張番して、弟子の歸るを待つて居たので、

四の五の言はずと、逢はせてくんねえ。」

その勢ひの烈しさに伊之助は奥に駆込み、軍刀齋に委細を語ると、軍刀齋は脛に疵持つ身の、ギクリと應へたが逃げもされず。

「何か仔細が有るであらう、此室へ通せ。」

と、伊之助に案内させた男は、確かに御殿山で見受けた男。

「何處から見えたか存せぬが、始めて面習、拙者は眞庭軍刀齋。」

「こんたは始めてかは知らねえが、忘れも爲ねえ四年前、越前金津の山中で、旨め

えことを爲なさつたね、千兩箱でドツシリと。」

「うーん。」

と、軍刀齋は顔色變へて、思はず左手が刀にかゝる。

「巫山戯た眞似を爲なさんな、此方にや確かな證據がある。」

と、懐から取出した四ツ目の紋ある袷の片袖を押擴げ。

「行くをやらじと止める拍子に、裂けて残つた此の片袖、千兩奇麗に出して貰はう



かい。』

「こりや怪しからぬ言ひが、拙者に於て覺えは無いわ。」

「覺えが無えとは言はせねえ、彼夜こんたが掘出して逃げなすつた千兩箱は、俺の親分薊の權次が、金津の吳服屋紀の國で奪ひ取つた、二千兩のその一つだ、埋めて置いて時を計らひ、掘りに行つたら先に廻られ、二つあるとは氣も着くめえが、一つ抱へて逃げて行くのを抱止めた時こんたの人相骨格を、卯月の空の星明りで、穴の開くほど見て置いた、物した物を物されて、黙つて居ちやあ身が立たねえ、此の片袖が證據にならざ、確かにこんたと睨んでおいた、黒い二つの眼珠を證據に、出る處へ出やせうかい。」

と、桿でも動かぬ面魂。

軍刀齋はグツとも言へず、刀は取つたが抜きもせず、眼を冥ちて四苦八苦。

「刀を握りや、一刀流の先生かは知らねえが、薊の權次の一子分、山犬の八にや骨

がありやす、抜くなら抜いて斬つて見なせえ、斬らざあ何とか返事を爲つせえ。」

「や、誤まつた〜。」

と、軍刀齋は刀を措いて。

「何を隠さう拙者として浪々の折柄、迷ひ込むる金津の山中、不圖躓きしを探つて見れば確かに金箱、天の恵みと心ならずも拾ひ上げたを支へたのは、其方であつたか。」

「何と覺えがごせえせう。」

「赤面の至りであるが、永年流浪致せし拙者、五百金に減けてはくれまいか。」

「さう事が判つて見れば汗水垂した黄金ではなし、親分が何といふかは知らねえが好うごせえす、五百兩に減けやせう。」



六二

軍刀齋と山犬の八との談判を立聴きした伊之助は、事の意外に驚いた、軍刀齋が吉原通ひの其の黄金は、自分の宅で奪られた黄金を奪つた物、御殿山で會ふたも確かに薊の權次、姉の報せがありさえすれば、敵の首は取つたも同然、とは言へ姉を何時までも苦界に沈めて置いては心が濟まぬ、請出すには三百兩、嗚呼、金が欲しいと寝ても覺めても金のことばかり考へて居たが、不圖想ひついた、軍刀齋が浪人にも似ず、五百兩といふ金を小判で山犬の八に渡した所を見ると、未だ貯蓄が有るに相違ない、貯蓄といふても、本を糺せば自分の宅で奪られた金、此れを盗むた所で天理に外れる譯はない、然うぢや、然うして姉を請出さうと度胸を定め、油断が有らばと軍刀齋の舉動を伺ふて居る。

軍刀齋は奉公人に然ういふ謀計のありとは夢にも知らず、晩酌の微酔機嫌でブラ

ラと吉原へ足を向けた、伊之助は仕合はせ好しと、軍刀齋が室に忍び込み、捜し出した金庫を打壊して見ると、中には封印した小判が三百兩、加之、封印は紀の國屋の判であつたので、擬ひも無き自分の黄金、天の興へと押戴き、委細の事情を手紙に認め、手頃の風呂敷にクル／＼包むで、馬道を一走りに朝日大黒に駈着け、綾衣に窃と手渡して何處ともなく影を隠した。

綾衣は、その夜は客が立込むので、包みを開く隙もなく、翌日、客を送出して仕舞つた午時分、部屋に籠つて包みを解くと轉けて出たは三百兩、これは不思議と添ふた手紙を讀むで見ると、三百兩は自分の宅で盗まれた二千兩の中の金で、持主は軍刀齋である、本は自分の金にしても、一旦主人と仰いだ軍刀齋の所持金になつた物を盗むたのであるから、訴へられたら科は免れぬゆゑ、暫らく姿を晦ますが、權次さえ捕へたら自分も潔よく名告て出る覺悟、姉さまは此の金で一日も早く身請して、母へ孝行してくれと、細々と認めてある。



綾衣はその手紙を顔にあて、前後正體無く泣き崩れて居る所へ。

「綾衣さんえ。」

と、聲をかけたのは姉女郎の七越らしい、綾衣は手早く黄金と手紙を隠し。

「七越さんごますか、入りなんし。」

と、身繕ひする。

障子を開けて入つた七越は、綾衣の泣顔を見て莞爾笑ひ。

「情夫からの文でも見て、嬉し泣きでありんすか、悪い處へ來やんした。」

「七越さん、然う浮氣に見えますかえ。」

「昨夜も馬道のが登つたではありんせんか。」

「あれは眞の勤めの客、弄ふことは御免なんし。」

「何の弄ふことでありんせう、ほほ……時に綾衣さんえ、つかぬことを訊くやうでありんすが、彼の馬道のは、以前大垣のお侍では有りんせんかえ。」

「然うでありんす、大垣の人とは聞いたことは有りんせんが、長良の轡飼が如何の岐阜提灯が斯うのと、彼地のことが委しうありんすゆる、萬一したら、然うかも知れぬと思ふのぞます。」

「今度來なましたら、能く訊いておいてくんなまし。」

「合點ごます。」

と、言つて追ひかけるやうに。

「それは合點ごますが、わちきの願ひも聴いてくんなまし。」

「これは又綾衣さん、叶ふことなら何なりと言ふてくんなまし。」

「願ひといふは外でもありません、あのそれ、七越さんの大事なく、權の字を緩々拜ませてくんなまし。」

「るッ。」

と、七越の顔色はサラリと變つた。



薊の權次は連流の襦袢姿、目火鉢を隔て、七越との差向ひ。  
 「ねえお前と俺とは深い仲、大日山で危い所を助けたのが縁となり、忘れもしねえ  
 勝山の宿で交はした假村、假の契りが誠となり、永平寺まで二人連れ、二年三年離  
 れて居たが、斯うした處で二年越しの馴染みにならうとは、出雲の神さまは粗末に  
 や爲れねえ。」

「折角落着いた永平寺を脱出したのも皆主ゆゑ、主の行方を知りたさに、岐阜の鳥  
 羽屋を尋ねる途中、人買に誘拐された時は、悪い奴ちやと恨むで居やんしたが、斯  
 ういふことになつて見ると、彼の人買が嬉しうありんす。」

「开んなに人買が嬉しくば、陰膳でも据えてやんねえ。」

「それは怎うでも可いとして、わちさや氣になることがありんす。」

「氣になるとは氣懸りだ、何だ〜」

「最前綾衣さんに、馬道の浪人のことを訊いて見やんした時、主を緩々見せてくれ  
 との竹篋返し。」

「何ッ俺を緩々見せてくれろと。」

と、權次は一寸氣色を變へた。

「主が浪人の素性を訊ねなますほど、浪人も綾衣さんから主を訊ねさすのではあり  
 んせぬか」

「そいつは何とも言はれねえ、野郎、ヅキやがつたな……時に華魁、折入つて依  
 頼がある、聽いてくんねえ。」

「大層改まつたことごますネ、わちさで出来ることなら、遠慮無く言つてくんたま  
 し。」

「そいつは有難てえ、實はネー。」



と、一段聲をひそめ、

「お前の妹、女郎綾衣の處へ来る、眞庭軍刀齋といふ野郎は、俺のためには兄貴の敵だ。」

「へッ、あの馬道の浪人が……」

「然うよ、住家は確乎馬道と突留めた、斬込むのは何でもねえが、弟子の野郎が澤山居るので、事が些と面倒だ、然うツカれたら今宵の中にも誘き出す工風は有るめえか。」

「それから如何する考へが……」

「卑怯なやうだが土手八丁に待ちうけて、撃つて取らうといふ魂丹、お前の智慧で誘き出してさえ貰へば可いのだ。」

「綾衣さんの手紙なり、何日もわらきが書いて上るんが書きますから、誘ひ出すのは何でもありませんが、對手は手練の浪人とやら、主に怪我でも有つたら如何しなま

す。

「ふん、その心配にや及ばねえ、今までお前に隠して居たが、人殺しなら二度三度、京阪筋ではお布令が廻り、御用となつたら打首か、逆襟けにならうも知れねえ薊の權次と言はれた俺だ、瘦浪人に敗けるものかい。」

「るッ、主は然ういふ悪黨さまかえ。」

「へ、ッ、悪黨は恐れいるがさう、聞いたら愛想が盡きたか。」

「田舎育ちの女でも、今は斯うした勤めの身、然ういふことを怖がつて辛い勤めが成りんせう。」

「うん、それを聞いたら俺も安心、華魁、俺を男に爲る積りで、軍刀齋を誘き出してくんねえな。」

「合點が、止めた所で止まる主でもありませんから……確乎昨夜も来て居た筈……」



「俺も廊下で警と睨むだ。」

「二寸待つてくんなまし。」

と、静かに立つて、重簞笥の戸袋から料紙硯を取り出し、サラ／＼書いた一通の文

「これ見てくんなまし。」

権次はズツと読み流し。

「うーん、これで結構だ、浮か／＼乗つて来るは必定、土手八丁に待ちうけて。」

「大きな聲を爲なます勿。」

六四

眞庭軍刀齋は一杯機嫌で、妻揚枝を咬みながら吾が家に歸つて見ると、裏も表も開放して伊之助の姿も見えぬので、妙なことだと思ひつゝ居間に通ると、生命から二番目の金庫が壊れて昨日山犬の八に渡した五百兩の残りの三百兩が紛失して居る

「アッ。」

と、愕いて一時は膽を潰したが、氣を取直して考へて見ると、伊之助が昨日の話しを立聴きして盗むで逃げたに相違ない、伊之助は金津の紀の國屋の悴と言つたこと杯思ひ合すと確かにそれだ、汝、憎い汝と齒軋りをして口惜しがる、追々に集まつた門弟共。

「先生、如何なされました。」

「一大事が出来致した、仲間伊之助が金子を三百兩盗むで逐天致し居つた。」

「やあ、そりや大變でござる、早速町奉行へ届けずば相成らぬ。」

と、氣の逸い門弟は其の儘戸外へ飛出した。

軍刀齋は、浪人の身で三百兩の紛失は太過ぎる、奉行が調べた時何と辯解したものか、訴へさす所では無かつたと、取越し苦勞をして居る所へ、使屋が届けた一通の文、請取つて見ると見覚えのある女文字、平日よりは水莖の跡も鮮かなので、混



雑の中ながら封を切ると、

ゆふべはわざ／＼の御はこばせ、しんぞ嬉しくぞんじまゐらせ候、さてとや、その折申上もらし候御身さまの御一大事候まゝこよい引過、御はこばせのほど、くれ／＼待入まゐらせ候。

讀了つた軍刀齋は小首を仰け。

「ハテ、御身さまの御一大事、身の上一大事。」

と、又もや文を繰返し、

「合點のゆかぬことではある……何は兎もあれ、引過と時尅まで限りしからは仔細ぞあらん。」

と、その儘手紙は懐に納める。

門人の中には、吉原からの文と悟つて軍刀齋の繰返し讀む状をクス／＼笑つて居るものもある。

暫らくすると町奉行から數名の役人が出張して一應の取調べを済まし、伊之助の人相年配など委細訊糾して、軍刀齋の氣遣ふて居た金の出處に就いては、何等問ふ所も無く引擧げたので、軍刀齋はホツと一呼吸。

「各位にも偉い御配意を煩はした、今日は稽古を休むで厄拂ひの酒宴と致さう、伊之助が逐天致したので甚だ不自由、各位好みの肴を注文して、酒宴の用意をして下され。」

「畏まりました。」

と、料理屋へ走るもあれば、酒屋へ走るもあり、間も無く調ふた酒肴で、門弟十四五人と車坐になつて酒宴を開き、先づ軍刀齋が杯洗から引上げた杯は、水を切る拍子に杯洗の縁にでも觸れたものか、バツチリと二つに割れた、延喜が悪いと儀式用の大きな木杯を取出して、金の紛失した憤滿紛れに、ガブ／＼仰つたので、見る間に茹蛸のやうに赤くなつて、門人の前も仰からず、肱を枕にグツスリ寢込むたので



門人は打連れ引上げた。

折柄打ち出す總泉寺の亥刻の鐘、軍刀齋は目を覺し。

『もふ八ツぢや、酔醒めの爲か寒くなつた。』

と、一本爛けて又もや獨酌でチビリ／＼傾つて居ること半尅餘り、時刻は好しと帯締直し兩刀を佩んで、ぶらりと吾家を立出でた。

『花咲かば、告げんといひし山里の……』

と、鞍馬を唄ふて土手に蒐り、此處道哲の付近と思ふ間もなく、バラ／＼と藪陰より白刃を揮つて飛び出した三人の男。

『武部軍太夫、覺悟ッ。』

と、一時に斬つてかゝる。

六五

醉ふては居ても一流の達人、打込むで来るやつを引ッ外して、大刀をスラリと引抜き、土手の柳を小楯に取つて青眼に構へ。

『何奴なるぞ、吾が名を呼むで不意打とは卑怯千萬、名を名乗れ。』

『名乗らずとも覺えがあらう、烏羽屋の身内の薊の權次だ、兄貴の敵、感念しろ。』と、烈しく斬込むを。

『何の。』

と、ばかり受流して、稍小半時チャワン／＼と斬結び、闇に火花を散らして闘ふうち、權次危しと見ゆるや、最前より藪陰に身を竊めて居た虚無僧が、發矢と打つた手裏劍過たす、軍太夫が眉間にザツクリ。

『アッ。』



と、辟易む所を、權次は隙さず、左の肩から肋へ斬下げ仰反る所を蹴倒して止めの一刀。

「酷い骨を折らせやがつた。」

と、言ひ乍ら血を拭ふて刀を納め。

「何處の方は存じませぬが、思ひ寄らざるお助太刀、有難う存じまする。」  
と、虚無僧を見上る、虚無僧は天蓋に手をかけて。

「禮には及ばぬ、半七殿への寸志でござる。」

「やゝ、そのお聲は赤城の旦那。」

「シー、拙者は當時根津に住ひ尺八指南を致し居る尋ねておちやれ、人目にかゝらば一大事、此の馬は早く立退かれよ。」

「何を言ふにも氣急ぎの場別、何れお禮に参りやす。」

と、山犬、水火の三人逆日本堤を一直線に、姿を闇に隠して仕舞つた。

藤九郎は例の如く、今宵も吉原を流しての歸途土手にかゝると、白刃を揮ふて武部と叫び、薊の權次と名告つての果し合ひ、勝負如何と伺ふうち、權次の斬りたてられるを見るや、早速の手裡劍覗ひ違はず、美事軍太夫を倒したのである、後日の證據になつてはならぬと、軍太夫の死體に探り寄り、眉間に立つた小柄を抜取つて鞘に収め、尺八を取直して雲間を渡れた二十三日の月を背後に、吹出したるは千鳥の曲、土手を下つて千束町を入谷へ抜け、此處鶯谷と思ふ頃、力を籠めて吹込む笛の音は、一層湧へて眠れる如き上野の杜に響き亘り、寂たる天地の間、唯餘韻の嫺々たるを聞くのみであつた。

藤九郎自身も感に耐えて、笛の音を止めると、天地は依然寂として死せるが如く空は何時しか黒雲漲り大粒の雨さえポツリポツリと落ちて来る、杜の彼方に一團の陰火がユラリ流れると見るや、藤九郎が行手へ濠ふて道を照らし、往けどもく自個が住家へは來ず、足の疲勞に正氣づくとは斯は如何に、何時の間にやら日本堤に



舞戻り、軍太夫の死體は眼前に横たはつてゐる、ハツと思ふ間も無く前後左右から「御用だッ。」

と、御用聴きが打つてかゝる。

「何の。」

と、ばかり尺八を逆に握つて暫時の間は闘ふたが、如何せん、陰火が眼前に陰顯いて思ふまゝには働けず、焦つて一足踏出す突嗟、グラリと乗つた石車、延倒る所を折重なつて卍字堀みに縛りあげ、自身番へ引立てられた。

薊の權次は、山犬水火の二人と共に其の場は一時立退いたが。

「この儘姿を隠しては、却て疑ひの種子を撒くやうなもの、當分容子を伺ふて、浮雲くなつたら逃げるまで、今狼狽へる時ではない。」

と、大引には未だ間もあるので、二人に別れて唯一人、再び吉原へ取つて返すと、土手には役提灯がチラ／＼往來ふてゐる。

「ふん、今頃檢視をしてゐるのか。」

と、冷笑ひ、何喰はぬ顔で朝日大黒へ押上つた。

六六

土手の人殺しの評判が吉原中に擴まつた。

權次は朝日の映すまで高野、敵妓の七越が床を離れて不圖見ると、昨夜新造が袖疊みした權次の衣服に、點々血らしいものが浸みてゐるので。

「さては殺つたな。」

と、獨合點、他人に見られてはとクル／＼捲いて箆筒に隠し、着替へに自分の裕と温袍を襲ねて置いて、そつと外へ立出でた。

間もなく眼を覺ました薊の權次、寢衣を脱いで赤條々、着替へんとした自分の着物物が付近に無いのでマゴ／＼して居る、と、七越が出がけに一寸許り閉殘した障子



の隙から、遠見に室の容子を伺ふて居るのは、豫ねて權次を付視て居る七越が妹  
女郎の綾衣、權次の背中一面に刺青したは鬼薊、その花の色は紅と言はん  
か火と言はんか、色白の膚に抹かした藍の配合の良さ、視て居る綾衣は振ひつくほ  
ど其の美に見惚れたが、頭に薊と感じると同時に、弟伊之助が話した薊の權次を聯  
想する、其の間髪を入れず、サツと自分の部屋に駆込み、剃刀を片手に引返すが早  
いか緋緋の裾もあらはに。

「敵ッ。」

と、斬つてかゝる。

女郎屋の二階のことゝて、腰の物は無し、寝起きの儘とて赤條々の無次は身を翻  
はし、利腕取つて控と投げる、投げられた綾衣は又起きあがつて斬りかゝる、ドタ  
ンボタンと騒がしい音聽着けて、七越首め新造進手若い衆が駈着けると此の有様。  
「まあ〜。」

と、二人を押分け、若衆は綾衣を取押へる、綾衣は聲を搾つて。

「放してくんなまし、〜親の敵ぢや、討たしてくんなまし。」

と、身を悶へ、油断あらば飛菟らん勢ひ。

權次は衣服を着る間もあらばこそ、七越に押隔てられながら。

「何だッ親の敵？ 巫山戯けた言をいやがんな敵と呼ばれる覺へは無い。」

「言ふ勿〜、越前金津の紀の國屋へ押込んで、父を殺して二千兩奪ひ取つた覺へ

があらう。」

「うーん。」

と、權次は眼を光らせる

「それだにこそ、昔界勤めに身を賣つた紀の國屋の娘とは氣も付くまい、放せ〜

親の敵ぢや

「知らぬ〜、發狂女郎の傍に居ては浮雲ねえ、着物を出してくんねえ。」



「知らぬといふて逃さうか、その夜手傷を負はされた、弟の話しに寸分違はぬ人相骨格、その刺青が何より證據、薊の權次であらうがな。」

「何と言ふても知らぬく、若い衆、其奴は氣違ひだ、放さねえやうにしてくんねえ、華魁着物を出してねえッてことよ。」

七越は一同の前、血の付いた物出す譯にも行かず、躊躇して居る、油断を測つて若い衆の手を摺りぬけた綾衣、又もや剃刀振上げて飛びかゝる。

「面倒な。」

と、脾腹を蹴つて倒れるを見向きもせず、障子を開けて表の椽側に飛出すと、斯は如何に三十人餘りの捕手が人垣造つて朝日大黒を取圍んでゐる、と沁る間に段階子を踏鳴らして十人餘り。

「權次、御用だッ。」

と、打つて蒐る。

此れまでとや思ひけん、權次はヒラリと身を跳らせ、欄干から軒裏に手をかけて大屋根へ飛び上り、屋根傳ひに一旦仲之町へ走つたが、下りる足場がないので、又もや水道尻へ取つて返す、捕手は早くも楮子を懸けて上らうとする、上らせてはと權次は手當り任せに瓦を剃いではバラリバラく投げ付ける、それにも構はず二三人駈上がり、逃げるを追詰め組着いて、捻伏せると勿返し、上になり下になりして争ふうち、下から注ぐ龍吐水の水に足這らして、組むだま、墜ちた所を取つて押え十重二十重に縛りあげた。

六七

如何して斯う早く手配りが届いたといふと、軍刀齋の金を盗むで逃げた伊之助が朝日大黒で姉の綾衣にその金を手渡して、大門口を出る所を、軍刀齋の届に依つて張込むで居た御用聽に押えられ、取調べになると、盗むだとは言へ元來自分の家で



盗まれた金、盗むだ賊は現在朝日大黒に通ふて来る、七越の客權次といふ遊人らしいと申立てた、めで有つた。

それと聞いた綾衣は、權次が捕へられたのは親の仇を討つたも同じであるが、救はれるものなら弟の伊之助が救ひたいと思案の上、幸手着かすの儘の三百兩、殊に封印も紀の國としてあるから、之を證據に願ふて出たら、助からぬことはあるまいと、朝日大黒を脱出して自身番に駆込み、金の封印を證據に歎願した。

奉行所では、幾回か日を重ねて權次を取調べ、又伊之助と突合はせると、伊之助の申立通り、權次に相違無い、權次も亦天命と断念めたか、犯した罪科を包まず白状したので、百日入牢の上鈴ヶ森で磔と言渡され、伊之助は主人の金を盗むだとは云へ、本を糺せば權次に盗まれた自分の宅の金であつたことが明瞭になつたのでお構ひなしとの言渡しであつた。

綾衣伊之助の同胞は抱合ふて喜び泣き、早速その金で自身の身請はしたものの、

せめては父の仇權次の仕置を見て行かうと、旅宿住居でお仕置の日を待つて居る。話し變つて權次と別れた山犬水火の二人は、脛に疵持つ身の迂濶には戸外にも出られず、終日鮫ヶ橋の假住居に籠つて居たが、日が暮れても歸つて來ぬので。

「こいつは變だ。」と、二人逆で吉原へと足を向けたが、朝日大黒では馴染みの顔であるから、權次の容子の知れるまでは、其樓にも顔は出されない。

『まよよ。』と、土手の茶店の暖簾を潜つて、有台肴で一本燭けさせ、二人でチビ／＼飲りながら落合つて居る客と客との世間話しを聞いて居ると、朝日大黒で大泥棒が捕まつたとか、土手で虚無僧が捕まつたとか穩かならぬ風聞、二人は目と目を見合はせて打驚き、勘定も粒忽／＼に戸外へ出た。



權次が入牢となつてから今日は満百日め、流石兇惡な薊の權次と言はれた男も、瘦衰へて生氣も失せ、傳馬町の牢屋から跛馬に乗せられ、罪狀記の建札に續きて日本橋通を鈴ヶ森へと送られる、往來ふ人は之を見て、哀れと悲むもあれば積惡の報ひと罵るもあり、人種々な取りくくの噂も耳には入らず、目を冥つて品川を越へ涙橋に來かゝると、群衆を掻きわけて轉び出でた一人の女。

「身寄りの者でございませう、今世の訣別に一目會はせて下されませ。」

と、おろく聲

「身寄りとあらば、暫時の對面許して遣はす、馬止めえ。」

と、檢視の役人は、非人に馬を止めさせる。

馬上の權次は誰れが來たかと目を開くと、思ひも寄らず朝日大黒の華魁七越であつたので。

「おう。」

と、一聲洩らした限り、能う來てくれたは口の中、熱い涙をホロリと流す、七越も亦權次が變つた姿を見ては、言葉も出でず泣くばかり、役人及び心無き非人までが哀れを感じて貰ひ涙を催す折柄、此ぞと飛び込む山犬水火の二人、山犬は罪狀記の建札を取るより早く、非人共を横殿りに殿り倒し、あれよくと狼狽へる間に、水火の猪之吉は手早く繩を斬解き、權次を小腕に引抱へ用意の馬に飛乗つて、東海道を雲霞と駈け出した。

六八

山犬の八は役人非人を相手に荒れ廻はり、水火の猪之吉が落延びた里程を測り、さつと身を退いて人込に紛れ込み、七越は山犬が荒れて居る間に素早く影を隠した豫ねて打合せてあつたと見えて、川崎の驛外れの一軒離れた木賃宿に落合つた薊の權次と山犬の八水火の猪之吉三人は、後から追手の懸る身の此處に悠々落着いて



居る譯にもゆかず、丑刻過ぎに密と宿を脱出して、東海道は危しと、星の明りで間道傳ひに仲仙道は甲府街道へと志し、急ぎに急いでその日の中に八王寺に着き、徳利龜屋に鞋を解いたが、容子が何だか尋常ならず、御布令でも廻つたのではあるまいか、と思へば思へるほど番頭女中の素振りまでが異様に見てるので、床には就いたがマンジリともせず、夜の明けるを待兼ねて八王寺を發ち、笹子峠を前に控えてその夜は初狩の驛に泊り、此處迄來せば一安堵と、三人寛いで酒など喚むで膳の上の小酒盛り。

「親分、危い所でござえしたな。」  
と、先山犬が口を切る、權次は莞爾笑ふて盃を乾し。

「今度こそは助からねえと思つたが、手前達の骨折りで、危い生命を取止めた、斯うして見りや、俺の運は未だ盡きねえ、重ねて悪事は働かぬと、赤城の旦那に約束はして置いたが、生命拾ひをしたが、僥倖、生れ變つた量筒で、太う短かう暮さう

か。」

「大聖寺の駕籠破りから、數へて見りや數の知れねえ兇狀持、どうせ疊の上では死ねえ親分子分、行れる所まで行つつけやせう。」  
と、水火の猪之は鼻息荒く。

「それでこそ俺の片腕だ、時に、今思ひ出したが、赤城の旦那の身の上が、如何なつたか聞かねえか。」

山犬は合點と言はぬ許りに。  
「佃客場に居なさる様子、水火の兄貴と二人で掛かりや助け出すには譯や無えが、若し行り損なつたら親分が助けられめえと思ひやすから、先親分を形付けて、それから行らうと思つて居やした。」

「佃の鳥は破るにしても、先だつ物は金が第一、此處迄來たを幸に、豫て噂に聞いて居る身延山に忍び込み、タンマリ仕事を爲やうちやねえか。」



「そいつは好い處へ氣が着きやした、身延と言へば宗門一の大福々、甲府から富士川を船で下りやあ譯は無え。」

「それちや身延で一仕事、首尾克う行つたら手前達、赤城の旦那を頼むだぞ。」

「あゝ、合點ですとも。」

手足を延ばして其夜は寛ぎ、相談通りに甲府から船に乗込み、下り、矢を射る如き急流を難無く猷澤を横に見て曙に上陸したのは、それから三日めの午過であつた道程を測つて見ると、寺へ着くのは夜半過ぎになるから、即刻山に蒐からうと、腹の仕度も充分に調べて身延山へと差しかつた。

何處で道を間違へたものか、行けども木立の中、岩を飛越え木根を攀ちて脚は勞れに勞れても、久遠寺の方角さえ定まらず、星の光りは最早子刻を過ぎて居る

「今夜の事にはならぬか。」

と、溜息吐いて三人が落肝して居ると、四五間向ふふにキラリ輝いた二ツの光り、

何であるかと眼を見張つて眺めると、それは大きな狼であつた、氣早な水火は抜手も見せず斬つて蒐るを狼はヒラリと蹶して奔蒐り、肩を目掛けてガブリと咬むで一振り振ると、水火は敢えなく息が絶えた、權次山犬二人は拔連れて斬込むと、何時の間にもやら二十疋餘の狼が交り々に奔蒐り、遂に山犬も咬殺されたので、權次は驚いて。

「アッ。」

と、いふ間に足踏こつて谷底へズル／＼と落込むだ。

六九

白洲へ引立てられた藤九郎は、中國浪人とはかりで實を吐かず、唯日本堤の人殺しだけは、岐阜の俠客鳥羽屋半七の敵と知つて、舊恩に報ゆるため財太刀の手裡劔を打つたまで、眞の下手人といふは薊の權次である、との申開きに一點の怪しむ



べき廉も無く、又權次の申立てとも符合するので、主犯である權次の所分の定まるまで暫らく傳馬町の揚屋に入れられた。

萬延の元年は更に文久と改元され、亞米利加其他の外國からは開港貿易に就いて手強く迫ってくる、朝廷に於ては鎖國主義を以て迫まられるので、幕府は開港と鎖國の板挟み、中にも閣老安藤對馬守の苦心は一通りでは無い、そのうち獨逸に對する條約の行違ひから、外國奉行堀織部正は對馬守と衝突して遂に切腹する、續いて織部正の家來三島三郎が芝の赤羽橋で亞米利加人ユースケンを殺したので、外交問題是一段と紛糾する、翌年正月十五日には、坂下門で安藤對馬守が内田萬之助豊原國之助等の浪士に斬られて四月には御役御免となる、薩長の兩藩が主動者となつて攘夷論が盛んに行はれ、延いては勤王倒幕の議論さへ起つて志士浪士は天下を横行し、幕府の威令の行はれぬことは夥しいそこで凡べての浪士を惡むの餘り、遂に赤城藤九郎は、無籍といふので佃島へ流すとの言渡し。

愈々佃に流された藤九郎、牢獄の苦痛の身に入むにつけ、犯せし罪の怖ろしさを思ひ出さずには居られない、古郷金澤を出て以來、越前の三國、美濃の大垣と、二度までも牢に入れられ、今又斯る島流しの憂目を見るとは、思へばお澤の怨靈が付纏ふての所爲ではあるまいか、二度までは薊の權次のために救はれて首尾克く脱れたが、今度こそは逆も通れることは出来ぬ、怨みの一念は怖ろしいものと、考へ込むと夜も碌には眠られない、無いより勝の木枕を友として横にはなつても、心の安まる隙も無く淺ましい月日を送る内、文久は三年となつて、その五月の初め、じめ／＼と降る五月雨に牢獄の裡の陰氣さは又一倍、夜は森々と聞けたつて唾を洗ふ大川の流れの音も物凄く、時を限つて撃つ板木の音も陰に響いて寂しく聞ゆる子刻頃

「旦那、旦那。」

と、細聲で呼ぶは、永い間の相牢で氣心も知り合つてゐる、上州無宿の又かの作と



いふ落破戸、藤九郎は。

「何だ。」

と、寢返り打つ。

又かの作は聲を窃め。

「お静かに爲せえ、他の野郎が氣取ると可けねえ、實はねえ、今夜此處を脱ける積りです、永らくお心安く願ひやした旦那のことですから、脱け出す分にや一人も二人も同なじですから、旦那も一緒に脱けなせえ。」

藤九郎とて一生を斯んな處で暮らすは残念、翼が有らば飛んでも逃げたいと思ふ矢先であるから二言と言はず。

「ふん、それは身共も望む所、如何致して脱ける所存か、見咎められては一大事。」  
「御心なされまする勿、貴下さへ御得心なら之から細工に掛りやす。」

と、自個が枕上の板を一枚スツと剝いで床下に潜り込み、暫らくすると床から頭

を出して土塗れの手で招く、藤九郎は招かる、儘に立ちあがり、作の後に續いて床下に入ると、何時の間に掘つたものか二尺角の根石を引抜いて、カツ／＼人の出られる位の穴が開いて居る、作は穴から外部へ這ひ出して四圍に氣を配つて居るうちに、藤九郎も這ひ出した。

七〇

赤城藤九郎と又かの作とは首尾克く牢を脱出して、牢番にも見付られず、闇を辿つてひた走りに大川岸に走り着け、繋いで在つた小舟に飛乗るや、繋繩を解いてウンと一ツ突張ると、船は岸を離れて一廻りクルリと廻つて川中へ出る、夜越しの雨に水量増した隅田の川下は、濁浪渦を捲いて滔々と流れて居る、其の流れに乗り出した船は櫓も棹も要らず、押流されて難無く佃島を離れたので、又かの作は一段と勇氣を振ひ、片足を舷に踏張つて腕も折れよと押す櫓の勢ひで早くも品川沖を過ぎ



大森川崎を後にして大師河原の沖合と思ふ頃、何時止むだともなく雨は止み、海は一面霧に籠められて咫尺も辨せず、東か西か方角も判らなくなつて、押せどもく櫓は確かに波を裂いてゐるが、船は一寸も動かない、又かの作は櫓を止めて。

「旦那、何だか船が動かねえやうですが、些たあ動いてますかい。」

「然ういへば、前刻から少しも進まぬやうぢや。」

「不思議ですネ、今しがたまで威勢良く來たのに、何てえ事でせう。」

と、不圖舳の方を向くと、青味を帯び黄色な一團の陰火がポツと燃えたと見るや、血塗れの女の姿が舳に絶つてハツタと睨むだ。

又かの作は。

「キヤッ。」

と、叫びで櫓臍を外し、逆筋斗を打つて海の中へ、汨然と落込むで行方知れず、後に残つた藤九郎は、船底の水板を一枚剝ぐが早い。

「汝ッ、又か。」

と、立上りさま打つて蒐ると、船は一揺れ揺れて高く中天に持ち上げられると思ふ間も無く、奈落の底へでも陥るかのやうに、キリ／＼廻はつて波の底へと沈むで仕舞つた。

藤九郎は正氣着いて四邊を見ると、曾て見たことも無い寢臺の上に寝せられ、床は一面に緞通を布きつめ、天井から壁は更紗模様の紙か布帛かは知れねど奇麗な裝飾、硝子戸の閉つた窓には、茶色で立派な織物の幕が垂れてある、その幕の隙間から外面を覗ると、蒼々とした波が油のやうに流れて居る、合點ゆかぬまゝ、キボリ／＼して居ると、扉を開いて入つて來たのは、眼の碧い毛髪の赤い西洋人であつた何やら二言三言云つたが判らない、西洋人は其の儘扉の外に出ると、今度は一人の



日本人を連れて来た、これは水先案内である。

「や、氣が注ぎましたか。」

と、日本人が近寄つたので、藤九郎は起上り、見るともなしに吾形を見ると、遂ぞ手を通したことも無い、真白い筒袖の裾の廣い西洋服を被せられて居る、不審は更に加つたのである。

改めて容子を聴くと、此の船は亞米利加の商船で、横濱を出帆して本國へ歸航の途中、藤九郎が正氣を失つて波上に漂ふて居る所を救はれたといふことが始めて判つた。

船は次第に進むで西へくと、長崎に寄港の豫定であるから瀬戸内海に入り、周防灘をも過ぎた文久三年五月十日の夜半、長州豊浦の沖に差蒐ると、待設けて居たらしく、壇の浦砲臺から不意に大砲を撃ちかけた、商船のこゝとて何等の武備も無いので應戦も出來ず、以前來た方へ引返さんとする刹那、突如顯はれた毛利家の軍

艦壬戌丸癸亥丸の二艘が左右から挾撃ちに砲火を浴びせかけ、瞬く間に三發の砲彈が命中したので、忽ち針路を轉じて豊豫海峡を突切つて日向灘に出で、大隅の佐多岬を横に天草灘を横斷して漸く長崎に着いて、藤九郎を長崎奉行に引渡したのは其月の下旬であつた。

七一

當時の長崎は本邦唯一の貿易場であるから、一步船入の屋形に踏込むと、支那人和蘭陀人が舩を並べて、眼も覺むる奇麗盡しの裝飾は日本内地とは思へぬ位、殊に幕府と外國の交渉頻煩になるにつけ、武術航海造船等も外國に倣はねばならぬとて和蘭陀から海軍士官機關士等を雇入れて海軍傳習所を設け、勝安房守麟太郎取締となつて旗下の士を養成する、一方造船に伴なふて製鐵場の必用を感じて、長崎奉行永井岩之亟(後に立蕃頭となる)は飽の浦に一大鐵工場を創立したので、職工は各地



から流込むで来る、傳習所へは薩摩筑前等の大藩からも入學する、長崎は彌上に般盛を極めて居た。

長崎奉行永井岩之壘は、亞米利加の船長から引渡された赤城藤九郎を一應取調べると、中國の浪人で江戸から相州浦賀へ渡海の途中難船して、亞米利加の商船に救助されたとの申立て、別に怪むべき點も無く、讀み書きは本より劍術は神陰流傳の伎倆であるから武士に相違ない、殊に内外多事の折柄、海防上人材の必要を感じて居るので、藤九郎の希望に任せて海軍傳習所に入れ、行く／＼は旗下にも推舉せんと、奉行は赤城を見込むで士分の取扱ひをして居たのである。

藤九郎も亦今一度は世に出て名を成し度いと功名心は衰へないので、日々海軍傳習所に通ふて孜々と勉強して居る内、筑前の藩士竹内勘三郎内田宗吉郎とは莫逆の交り結び、死生共に相助けん時まで誓ふ仲となつた。

一夜藤九郎は竹内内田の兩人に誘はれて丸山へ遊ぶで、屈指の青樓梅月に登樓し

た、藤九郎は始めてあるが他の二人は馴染客であるから、例の座敷に通されて眺への酒肴も運ばれたが、付近の青樓の陽氣なのに引替へて、心なしか梅月ばかりは森として鎮まり反つて居るやうな氣がするので、竹内が仲居を呼んで委細を聴くと斯ういふ事件が起つて居る。

梅月の娘で春香といふ藝妓がある、年は十九の花盛り、姿色は好し藝は出来るので丸山の流行兒、引手多數の遊客の中でも最も執心なのは、船入の屋形に毎年半年は住居する李張堂といふ支那は廣東の貿易商、黄金に飽かせて春香を靡かせやうとしたが、何としても靡かない、その靡かない譯は、春香には十七の暮から馴染めた情夫がある、情夫といふのは本町では名代の老舗、金物店多屋喜兵衛の長男名を三郎といふ好男子である、十三郎も意地盡で李張堂を向ふに廻して派出な遊びをしてゐる内、未だ部屋住の身分であるから、積り／＼と尠からぬ負債を生じて抜指ならぬ境遇に陥つて苦心の矢先、俄かに春香の姿が見えなくなつたので、十三



郎が誘拐したであらうとの嫌疑が懼つて入牢の身となり、梅月の主婦即ち春香の母は之が原因で寝着いて居るとの譚ものがたり聞いて居た竹内は。

「それは氣の毒千萬な話し、其の李張堂といふ支那の商人は不相變遊興に參るか。」

「時々は見えますが、春香さんの居られます時程には派出な遊びも爲されませぬ。」

と、仲居は判然答へる。

「御兩所、疑はしきは其の李張堂とやらではござらぬか。」

と、竹内は意氣込むだ調子。

「如何にも御推察の通り、李張堂こそ怪しき人物。」

と、内田は調子を合はせる。

竹内は愈々意氣込むで仲居に向ひ。

「好いことを話してくれた、役人共が斯やうなことを致す故、外國人が増長致す、

拙者が引受け十三郎とやらは助けて得させる。」

「ま、お待ちめされ、貴殿方は主君ある御身分、此儀は拙者にお任せ下され。」

と、藤九郎は始めて口を切つた。

七三

「例之、主君を戴く身分と雖ども、義を視て爲ざるは勇なしとの金言もござる、殊に奉行の所置宜しからざるため、外國人は益々増長致し、動ともすれば無禮の振舞ひ致し居るは、誠に國家の耻辱でござる、此期を逸さず李張堂を取つて押え彼等を充分懲らさば、奉行を首め幕府の有司も眼を覺ますこととござらう。」

と、竹内は憤慨極まつて、口角火を吐かばかり。

藤九郎は莞爾笑えて。

「拙者とても同感でござる、亞米利加に致せ普露西亞に致せ、竟畢我が國を侮れば



こそ我儘千萬なる條約を迫るのでござる。併しながら此度の儀は、申さば一の私事御身分ある貴殿方を煩はすまでもござらぬ、若し仕損じたる其節は兎も角も、貴殿方は未永く國家の爲にお盡しめされ、斯る細事は拙者如き浮浪人にて足り申す、何卒拙者にお任せ下され。」

「國家を前に致せば、成程細事ではござれども、貴殿御一人にお任せ申しては、朋友の義が相立たぬ。」

「否々、御斟酌は無用にされい、春香とやら又十三郎とやら申すは、未だ顔さえ知らぬ人物なれども、此の兩人を救ふため李張堂を取つて押ゆるは、即ち我が武士道を輝かして、渠等の膽を奪ふ一端、貴殿方には國家の大事が眼前に横たはつてござる故、此の儀は拙者にお任せ下され。」

と、藤九郎が理を説いて動かぬので、竹内も藤九郎の意氣に感じて一言もなく、暫らく思案の體であつたが。

「御高説至極御尤でござる、今や鎖國攘夷といひ勤王倒幕といひ、藩論兎角區々にして定まらず、天下多事の際でござれば御高説に隨ひ、此儀は貴殿にお任せ致さう併し、朋友の誼み、陰に陽に必ず御助力は仕る。」

「御承引あつて本懐至極、然らば拙者はこれにて御暇致す。」  
と、立ちあがる。

「貴殿がお立ちとあらば御同導致さう。」  
と、三人は其の儘梅月を引擧げた。

義侠といはゞ義侠でもあるが、一種の好奇心に驅られた藤九郎は、翌日から海軍傳習所へは通はず、毎日市内をブラ／＼歩行いて、湯場床屋を始め凡そ人の群集する所ならば、神社佛閣を選ばず汎ねく足を入れて、世評を聴いて見ると、市内の女で行方不明になつたのは、單り梅月の春香ばかりではない、春香と前後して七八人行方不明になつて、それが皆姿色は十人並で十六七から二十位迄の年齢に限られ



て居ることまで聴出した。

春香を基礎にして考へると、他の七八人の行方不明になつた女も、春香と同じ運命に陥つて居るに相違ない、然うなると春香に執心の李張堂が益々怪しく思はれるので、藤九郎は一日李張堂の容子を探らんものと、船入の屋形へ進つて来た。

此の船入といふは、幕府から外國人の陸上住居を禁じてあるので、海岸に防波堤を築き、其の中に船を入れて貿易の濟むまで、二月三月乃至半年位も船中に起居するのであるから、此の船入に來ると條約國の船が何十艘といふ數を知らず、岸に沿ふて舷を列べた状は、陸上に軒を列べた町家に異ならぬのである。

李張堂の住居は頗る手廣く、千石船を二艘列べた位の大きな構へで、朱やら青やらの彩色で奇麗に塗りあげ、柱といはず檼といはず、角々には金銀銅の金具を打つて、その美しさは繪で見える宮かお寺のやうで、到底船とは思へぬばかり、岸に渡した棧橋の詰めには、筋骨逞しき男が二三人宛交替して見張をして居るなど、警戒な

か／＼嚴重で、迂濶には乗込めさうにない、その警戒の嚴重なだけ藤九郎は、愈々李張堂を怪しと睨むだ。

七三

藤九郎は縞の羽折に紺の前垂、短刀を一本懐に忍ばせて、態と無腰で李張堂の棧橋にかゝると見張の男はバラ／＼と駆寄つて。

「何の御用。」

と、判然した日本語。

藤九郎は腰を低く。

「わたくしは大坂鴻池善右衛門の手代久造と申しまする、緞子を少々戴き度いと存じて参りました、切望、お通しなされて下されませ。」

顧客と聞いて男は容子をガラリと變へ。



「これはお客さま暫らくお待ちなされ。」  
と、取つて反す間もなく。

「お通りなされ。」

と、案内された一間は應接室と見えて、紫檀の卓に黒檀の椅子、燃えんばかりの絨緞を敷詰め天井は凡べて金銀を鏤ばめて、見る目も眩ゆく、錦繡緞子綾襦珍處狭しと積上げ、一段高き床の上には金銀珊瑚瑠璃玳瑁、古銅の古色蒼然たる種々の佛像刀劍銅鼎などを陳列して、其の價何萬とも知れず、宛かも寶の山に入つたかのやう、藤九郎は其の壯觀に肝を奪はれ、暫らくは茫然として椅子にも馮らす立盡して居る所へ、鷹揚に出て來たのは主人の李張堂、脂肪漲つて艶々しい赤顔、五十過ぎとは見ゆれど元氣好く、何點となく殺氣を帯びて人を射る眼光の鋭さは、一癖も二癖もあるべき人體。

「これは、鴻池の番頭さんとやら、好くお出で下された、どうぞ悠々御覽下され。」

れ。」

と、叮嚀な挨拶の下から、茶が出る茶菓子が出る煙草が出る、なか／＼行届いた持成し、藤九郎は胸に一物あることとて多くは物言はず、見本に出された十何本かの緞子を、兎見斯見、氣に入らぬと見れば三人の店員が直ちに代りの品を持つて來る忌でも買はねばならぬの仕向けを、藤九郎は氣にも留めず、緞子を見る振りで頻りに李張堂の油斷を伺ふて居る、室内備付けの品を一通り見たが、買ふべき品が無いらしいので、三人の店員は代りの品を取りに室外へ出た、室内は李張堂と唯二人になつた、藤九郎は今ぞと飛鳥の如く李張堂に飛蒐り、有無を言はさず胸倉取つて捻倒し、馬乘りに乗蒐つて。

「鴻池の番頭とは偽り、吾れは名の有る日本の武士だ、尋常に誘拐した春香を出せばよし、出さぬに於ては締殺すぞ。」  
と、咽喉をクユツと締めあげる。



李張堂は締められながら。

「知らぬ覚えぬ。」

の、一點張で力をこめて刃反さうとする、藤九郎は然はさせじと尙ほも締付ける、處へ數多の緞子を持つて來た店員、此の體を見て大きに驚き一人が藤九郎に飛蒐るを、藤九郎は足蹶に蹶倒して李張堂を締めたまゝ踏付ける、二人の店員が室外に飛出すや否や、十五六人の荒男が、手にく得物を取つて跳込むで藤九郎を取圍む、藤九郎は片手で短刀の鞘を拂ひ李張堂の咽喉に擬し。

「手向ひ致さば唯一突きだぞ。」

と、睨み廻はす、

男共は、

「あれよく。」

と、ばかり得物は持ちながら、主人を押えられて居るので手の着けやうが無い。

李張堂は手を合はせ

「生命ばかりはお助け下さい、お察し通り春香は手前が誘拐した、早速返す許して下さい。」

と、藤九郎の勇氣に忍入つて居る。

「女を返せば生命は助ける、早々此處へ連れて參れ。」

と、尙ほ李張堂の胸倉は離さない。

李張堂は仰向けに倒された儘、何か店員に命けると、間もなく二人の男が連れて來たのは一人の女。

藤九郎は屹乎見て。

「其方は春香と申すか。」

「唯、春香でござりまする。」

「呟。」



と、藤九郎は手を緩めて立ちあがると、續いて起あがつた李張堂が、トンと一ツ床を踏むと見るや、藤九郎の立つて居た處が三尺許り、ドンデン返しにクルリと廻つて藤九郎は床下へ轉げ込むだ。

七四

『アッ。』  
と、言ふ間もあらばこそ、如何なる仕掛けか藤九郎は、ズル／＼と床下深く陥つて四圍一面眞暗黒、空氣は冷くて何となく腥く、手搜りに手搜つて見ると、四面は板壁で苔か微かは判らぬが、手の掌にニチャ／＼する、油断をすると足は這つて倒れさう、元より針で突いた程の穴も無いので光線が洩れるではなし、眞に鳥羽玉の闇の底、壁の一方を叩いて見ると、トドンと幽かに音がする、その響きが水中に浮べた樽でも叩くやうに聞えるので、海中深く沈むだ船の底に陥されたと始めて氣が着

いた、が、四面はヌラ／＼する板壁で、足掛りになるべき物は更に無く、到底脱け出す道は無い、時刻の經つに隨つて寒さは感じる、腹は空いて来る、ブル／＼懐へて齒の根も合はなくなつた、如何に百掻いても策の施すべき餘地も無く、日が暮れたやら、夜が明けたやら、更に判らぬ闇の中で飢死するばかりの運命とはなつた。  
藤九郎は百掻きに百掻いた末、遁れぬ所と感念してグツタリ船底に倒れて仕舞ひ只管既往を追懐して悔悟の念に驅られて居ると、間數ならば二間も隔てた位の處で頻りに女の歎息する聲が聞こえる、聞くともなしに耳を引立てると、男の聲で、  
「やい／＼、何をメソ／＼泣きやがる、既斯うなつたら、幾許泣いても喚いても遁れぬ所だ、この李張堂を何と思ふ、普通の商人と思ふたら大當違ひ、當時臺灣から厦門にかけて隠れのない、李滔天といふ海賊の張本だ、今宵の暗を幸ひに此の地を乗出し、支那本國へ歸つた上は諾矣と言はうが言ふまいが、心の儘に爲にやおかぬ時も時として飛込むで來た侍は、對馬の沖で水糲炊を喰はしてやる。」



と、さも憎々しく言ひ棄て、居なくなつたか男の聲はハタリと止んで、後は女の泣聲ばかり、

之を聞いた藤九郎の心は俄かに騒ぎ出した、此の儘じつと爲て居ては、今の男の話して見ると、對馬の海峡に投込まれるに相違ない、遁れぬまでも斯うしては居られぬと、短刀を逆に握つて女の聲を便りに、板壁をザリ／＼切り初めた、

漸くにして板壁一重截抜いたが、此も同じく眞暗黒、這る足を踏みしめて、二三間進むと女の泣聲は明了聞こえる、最ふ一重だと勇氣を鼓して、又も短刀で五刀六刀板壁を截ると、白糸を垂れたやうに光線が一條射して來たので、占めたとはかり鍵の手に截破り、力に任せてウンと推すと、板壁はメリ／＼と裂けて、力餘つた藤九郎はひよろ／＼と明るい部屋へ飛び出した、見ると春香は荒縄で雁字搦みに縛られて、仰向けに突踏されて居る、藤九郎は早速縄を斬解き、抱え起して何所か遁出す場所は無いかと四邊を見廻はして居る時しも、階段をドスン／＼と下りて來る足

音がする、見つけられたら百年目と短刀を逆手に構え、春香を後に圍ふて寄らば斬らんと待つて居る、階段を下りて來たのは李張堂の子分と見えて、此の體を見るや呼子の笛をピリ、と鳴らしつゝ、逃しはせじと階段に踏はだかつて大の字形、

「汝、邪魔する勿し」

と、藤九郎が斬りかゝると、階段の上から雪崩を打つて下りて來た荒手が二十人許り、藤九郎を追取圍むで長い刀を抜そばめ、ジリ、／＼と攻寄せ、藤九郎は一生懸命、目を八方に配つて居るが多勢に無勢、追ひすくめられて次第／＼に後に退り背は早壁すれ／＼の所まで追詰められ、二進三進も行かなかつた、此ぞ捨身と體を跳らして正面の男を見かけて飛蒐つた一刹那、轟然と天地に響く物音と共に、地震のやうに搖々と動ぐと思ふ間もなく、足下には沸くが如く海水が滔々と流れ込み、瞬く隙に脛から膝まで浸したので、寄手はワツと叫んで吾勝ちに階段を昇つて行く。



七五

筑前の藩士竹内勘三郎内田宗吉郎は、赤城藤九郎が李張堂の住居に乗込むと語つて出た限り、二日経つても歸つて来ぬので、若し過ちでも有りはせぬかと、船入に來て容子を見ると、李張堂の船子共は騒然して出帆の準備に忙はしい、此の船この儘出帆させてはならぬと、二人は薩摩の有志を語らひ、海軍傳習所の小蒸氣船を仕立て、竹内は之に乗組み、内田は同志と陸から斬込まうといふ相談即座に定まつて、水陸兩方から迫まつた時は、藤九郎が九死一生の際であつた。

偶々竹内が發射した水雷火が命中して船は次第に沈む、陸からは内田が先頭で斬込むので、李張堂一味の者は悉く捕へられ、誘拐された十名許りの女は悉く危難を免れ、博多屋の長男十三郎の冤罪も茲に全く晴れた。

竹内勘三郎等は李張堂に繩打つて、長崎奉行へ召連訴へをする、奉行が一應調べ

て見ると、容易ならぬ海賊であつたから、直ちに早打ちで江戸へ届ける、それから清國政府へ交渉といふ段取になると、事件が意外に大きくなつたので藤九郎は自分の郷貫を調べられては事面倒、如何せんかと工風を運らして居る時しも、偶々筑前の志十平野次郎國臣が、澤審嘉卿を奉じて生野の銀山に籠り、討幕の義旗を翻し汎ねく浪士を募ると聞き、竹内内田には希望を吐露し、長崎を脱走して長州下關に上陸し、晝夜兼行で石州境界まで來ると、銀山は既に陥り、大將宣嘉卿は圍を脱して遁れ、平野次郎は捕はれて近く京都へ送られるとの噂を聞いた藤九郎の失望や如何ばかり、斯くなるもお澤の怨靈の所爲では無いかと、事有る毎に何彼に付けて、既往の罪科で吾れと吾が心を苦しめて居た。

文久四年は改元されて元治元年となつた、是れより先、長州の毛利公は、幕府が逡巡して攘夷論を實行せざるを憤りて、朝廷に議を建てまつり、大和の畝傍山に行幸あつて攘夷の師を起し給はんことを奏請した所が、三條公以下有爲の公卿は此



の奏請を可として、着々行幸の準備を進めて居るうち、京都の守護職會津の松平侯は事容易ならずと見て、親征の不可なる所以を説き、諸侯の中にも松平侯の説を賛成する者が多かつたが、就中、長州と軋轢して居た薩摩の島津公は、長州の勢力を壓へんとの腹案も有つたので、長州が畝傍山行幸を奏請したのは、天下の浪士を煽動して禁闕を擾がすものであるから、幕府は宜しく長州の罪を糺すべしと揚言したので朝議は急に一變して、行幸は御中止となり、長州人を京都より退去せしめ、尙ほ長州兵で勤めて居た御所の宿衛まで止めさせられた、その結果、畝傍山行幸に賛成した公卿、三條實美、西三條季知、東久世通禧、四條隅調、壬生基修、錦小路頼徳、澤宣嘉の七卿は、京都を落ちて長州へ走る事になつた。

禁門の宿衛を止められたといふことは、長州毛利家に取つては多大な不面目でもあり、又國家有事の際、有爲の七卿に罪無き配所の月を見させるのは、情として忍びざるのみならず、毛利家の體面は飽くまで保たねばならぬと憤つたのは、國家老

福原越後であつた。

そこで福原越後は、朝廷に上書して先づ毛利公の冤罪を訴へ、七卿の復職を請ひ同時に長州人の入京を許されんことを請ふべく、兵三百人を率ゐて京都に上ることになつた、石州から引返した赤城藤九郎は周防の三田尻に逗留中、傳手を求めて、此の福原の同勢に加はり、長州山口を出發したのは同年六月二十三日であつた。

七六

赤城藤九郎の加はつた福原越後の同勢は、嵯峨の天龍寺を本營として山崎に陣を張り、福原は朝廷に向つて藩主毛利公父子の冤罪と、七卿の復職、長州人の入京允許を、頻りと歎願したのであるが、容易に勅許を得ないのみならず、時に京都に在つた徳川十四代の將軍家茂の後見一橋慶喜公は、使者を天龍寺に遣はして歎願の筋あらば福原越後一名留まつて、同勢を三日以内に歸國せしめよと諭したけれども福



原は應じない、偶々同藩の家老職、國司信濃、益田右衛門の兩人も、福原と同じ主張の下に各々三百餘人の兵を率ゐて上京して來たので、同勢殆んど一千餘りとなつた。

そこで京都守護職會津公は、長州人が徳川慶喜卿の命を用ゐず、兵を率ゐて京都に入るは朝廷を侮るもので、其罪は斷じて許すべからずと奏聞した、それと聞いた福原越後以下の長州の藩士は、我藩を讒言するものと大いに怒り、先づ君側を清めねばならぬとあつて、會津公が御所の内なる凝花洞に居ると知れ、時を移さず撃つて取らんと、七月十九日の拂曉、福原越後は眞木和泉を大將として嗟峨を發し、帷子街から二手に岐れて、一は中立賣門、一は蛤門に向つた、御所を守護する會津の兵は、死力を盡して戦ふてゐる内、御所内の公卿屋敷に潜むで居た長州藩士が、抜き連れて會津の兵の後から関を揚げて斬込むたので、會津兵は前後から挾撃されて全滅の運命は免れぬ所、藤九郎は蛤門から進むだ一隊に加はり、功名手柄は今の時

ぞと、手馴れの一刀を揮り翳して會津勢の中に斬込み、四方八方に斬り捲くり、大童になつて闘ひつゝ、遙かに見ゆるは、馬に跨つて葦山笠を戴き、金の探配を揮つてゐるは確かに會津方の隊長、撃ち取つて手柄にせんと驚々地に跳りかゝる、今一步といふ所で馬前に當つて一條の白氣が騰つた、藤九郎は、

「ハッ。」

と、一步退いた一瞬間、横合ひから撃出した桑名藩の鐵砲に、右の肩を撃抜かれて撞と其場に打倒れた。

會津兵は、桑名藩の不意の應戦に方を得て頽勢を盛りかへし、後れ遅せて押寄せた薩摩勢と力を併せて激戦數刻、山崎に屯して居た福原勢は、山崎街道を東寺に出で進むで鷹司邸を襲ふて、越前查根の諸藩と戦ひ、戦負孰れとも決せず、徳川慶喜卿は、時移らば如何なる異變の起らんも測られずと、薩藩に命じて大砲を發射したので逸りに逸る長崎勢も之れには適感ず、久坂來島等長藩の勇士は討死、眞木和泉



は残兵を纏めて一旦天王山に引揚げたが、會津兵に追撃されて遂に自殺する、後詰めとして山崎に控へて居た益田右工門は、此の敗報を聞いて直ちに兵を解散して山崎を走るといふ、長州勢は散々な敗北で、藤九郎を同勢に加へた福原越後は、國司益田の二人と共に歸國の後切腹した。

赤城藤九郎は、九死に一生を得て僅かに戰場を免かれたが、本より長州の藩士といふではなし、三家老は長州に走つても、それに加はることも出来ず、殊に重傷で長途の旅は出来ないので、山崎の民家に潜むで専ら傷の養生をして居るうち、月日は流るゝ如く元治元年も押詰つて十二月となり、寒さは次第に加はつて来た、成雪の降る夕暮のこと、宿の主人と圍爐裡を焚いて世間話しに時の移るをも忘れて居ると、表の障子を細目に開けて哀みを乞ふ一人の女乞食、見ると十許りの男の子を拉れて居る、身には此の寒天に洗ひ晒した白地の浴衣に、繼だらけの縞目も知れぬ袴を襲ねて、酒樽の菰を肩にかけ、頭の髪は蓬のやうに纏れてゐる、子供は裾の

短い若和布のやうな襦袢を纏め、手も足も凍傷で茹た海老のやうに眞赤になつてゐる状は、見るからがいたくしい。

七

藤九郎が大垣の牢を脱けてから後の鳥羽屋半七方は、一旦は嫌疑は受けたもの、本より薊の權次一人の所行で、おさんを首め子分の漢一人として關係したものの、無いことが明白となつて、半七の後は才助が引續いて稼業を営むで居るうち、因果の胤はおさんの腹に宿つて、十月を過ぎ十一月の末に頗る難産で男の子を産落した産婆が取り上げて初湯を使はすと愕いた、左の肩から肋骨にかけて紫色の痣が一條如何にも刀で斬つた疵の治つた迹のやう、産婦に知らせては血でも逆上つてはならぬと、當分は隠して居たが、名を半一と命け三十三日も過ぎておさんが自から湯など使はすやうになつて、始めて驚いたが衣服を被せると隠れて仕舞ふので、指が足



らぬの足が跛といふではなし、と自から慰めて掌中の珠と愛しんで育て居る、成長くなるに随ふて、其の眼鼻口元髪が生際までが、半七には似もやらで赤城藤九郎そのまゝ、太るにつれて益々藤九郎に似て来るばかり、加之、誕生過ぎて一言も言はず、三歳になつても、唯、トウ、トウといふばかりで、其の外の言は一口も利かず、耳も聴えぬ生れついでの哑であつた。

おさんは現在自分で産むた子であるから、憎からう筈は無く、殊に不具の子ほど可愛いもので、強い風にも當てぬやうに育て、はるるが、胸の痣といひ、容貌の藤九郎に似たこと哑であることなど思ひ合はせると、何かの報ひか祟りではあるまいかと、人知れぬ苦しい思ひの絶間は無かつた。

隠すとすれど顯はれ易く、何時しか世間にバツと洩れて、人魂の出たことまで新らしさうに結びつけて、半一を世評の種子にしておさんの素行まで兎角の批難が起る、それが何彼に影響して商賣は手違ひ續き、一時は日の出の勢ひであつた鳥羽屋

も、半七が死んで半一が産れてから、西に傾く日影のやうに次第に衰へ、思慮ある子分は將來を見抜いて一人減り二人減りして、衰亡の影は日々に出入りの人の少なくなるにも見えるのである。

斯うなると金主の方でも、半七が生前の負債を一時に催促して来る、遂には家屋敷を賣拂ひおさんは、生れ故郷を後にして、罪障消滅のためにもと半一を拉れて西國巡禮と志し、四國八十八ヶ所の靈場を残らず巡り、旅用は盡きて乞食とまで成下り、毛羽打枯らしても故郷忘じ難く、再び岐阜に還らんと辿り着いたは山崎の驛折柄の大雪に行き暮れて、軒下なりとも借らんものと尋ね寄つたのが、藤九郎が傷養生のため身を潜めて居る百姓家であつた。

圍爐裡を焚いて居た農家の主人は、つひと立つて来ると、雪は二寸餘り積むで居る。

「まあ、この雪に嘸寒からう、見れば子供連れで難澁なことであらう、構はぬから



一時入つて休ましやれ。」

と、見掛に似合はず親切な口吻、

女乞食は、さも嬉し氣に、

「御親切に有難うござりまする。お見かけ通り子供は連れて居りますし。この大雪では如何もなりません、お慈悲に軒下なりと拜借して夜を明かさせて戴かうと存じますして……」

「軒下などに寝られるものか、宅には藁が澤山ある、それを敷いて寝やしやれ、可哀相に子供は震へて居るぢやないか。」

と、納屋から幾個かの藁束を取出して庭の隅に置き。

「さあ此處に寝るとして、見れば着物も濡れてゐる、爐に當つて焙らしやれ。」

と、何所までも親切盡す、  
「唯、段々との御親切有難う存じまする、汚苦しうござりますが、暫らく焙らせ

て戴きまする。」  
と、子供の手を曳いて競々圍爐裡の側に近寄つた。

七八

一枝二枝焚添へた槽の勢良く燃えあがつた明りで、思はず見合はせた藤九郎と女乞食の顔と顔。

「や、其許は、おさんどのではござらぬか。」  
と、藤九郎は愕いた。

「お、貴下は旦那さま、見苦しい此の形でお耻かしうござりまする。」  
と、カツバと伏して泣出した。

主人は更に愕いて藤九郎と女乞食を見渡して。

「お武家さんは、このお菰さんとお知合ひでござりまするか。」



藤九郎は頼には返事も出なかつたが、睫毛に宿る涙を拭ひ。

「御亭主。人の浮沈は判らぬもの、此の女中は拙者が前年恩誼を受けた岐阜の伊達衆にて、鳥羽屋半七といふ仁の御内儀でござる。」

「へえ、然うでございますか、浮沈みは判らぬものでござりますな、お武家さまのお知合ひとあつては、この儘では措かれぬ。」

と、納戸から持出した衣類二三枚。

「これは婆の着古しですが、その形では寒いに依つて、遠慮無く手を通して下され子供衆には大きからうが、まあ、着て下され。」

と、差出されたをおさんは押戴き。  
「折角の御親切、有難うはござりますが、斯ういふ結構な物を戴きましては、冥加の程が怖ろしうござりまする。」  
と、辭退するを亭主は首を振り。

「何のく、これは過去つた婆の古着、汚いと思ひなさらうが、着て下されば婆さんへの功德にもなる、遠慮せずと、着て下され。」

「御亭主の心切、辭退せず貫はしやれ。」

と、藤九郎も言葉添へたので、おさんは涙を推拭ひ。

「渡る浮世に鬼は無いと申しますが、何といふ御心切なお方でござりませう。」  
と、着物を脱いで又も泣く。

「さう事が判つたら、足を洗ふて上らしやれ。」

と、いそ／＼起つて盥を運び、圍爐裡にかけた釜の湯を汲むでおさんに與へる、おさん親子は地獄で佛と喜むで、顔を洗ひ手足を清めて衣服を着換へ、圍爐裡の下手に慎ましやかに坐を占める。

藤九郎は亭主を憚かるやうに、おさん親子を凝視めて居たが。

「變り果てた其許の身形、これには深き仔細がござらう、御亭主とは氣心も知合つ



た中、遠慮なく話されよ。』

と、身の上話しの誘ひをかける、おさんは兎もすれば催す涙を拭ひながら。

『何から先にお話し致しませうやら、貴下がお發ちになりましたから、烏羽屋の宅は不吉な事ばかり、其中にこの子が産れましたが、思ひもよらぬ不具兒。』

『不具とは。』

と、藤九郎は子供の顔を見ると、何となく自分の顔に似て居るので、ヒシと何かで胸を折られた心地。

『唯、生れ付いての啞でござりまする。』

『何といふ因果なこととござりませう。』

と、亭主は我が事のやうに同情して、小供の頭を撫せまはす。

『歎きのうちに子分の漢はちり／＼ばらく、半七の借財のために家屋敷は他手に渡り、身寄りの者とてもござりませぬゆる、西國巡禮と志し、廻國致して居りま

すうちに、權次どのにも廻り合ひ、この子の行末をお頼しやうとも存じましたが、權次どの行方も知れず、路頭に迷ふて居りまする。』

亭主は傍で聽いて居たが、おさんの方に向直り。

『今權次どのと言はれましたが、その權次といふは若しや灘の生れではござりませぬか。』

と、思ひ込むでの問振り、おさんは一寸考へて、返事の晩れるを藤九郎は受取つて

『如何にも攝州灘の産、薊の權次と綽名のあるもの。』

『それでは依然吾が子の權次。』

と、亭主はおさんを見上げ見下した。

七九

『權次どのを、依然吾が子と言はるゝは。』



と、藤九郎は亭主の顔を屹乎見る。

亭主は迫来る涙を拭ひ。

「お話し申せば耻かしい次第でござりますが、わたくしは其の權次の實の父甚兵衛と申します、何の因果か知りませぬが權次は七ツ八ツの時分から手癖が悪く、責め折檻も致しましたが、生れ付きなら直らぬものか、十五の年に年貢の用意に溜めて置いた二十兩餘り盗み出して行方知れず、婆はそれを苦に病むで仕舞ひましたそれから容子を聞きますと、福島のとやら云ふ親分の處に辛抱して居ると知れましたゆゑ、切望、量見を直して戻つてくれたら身代を譲つて、わたくしは隠居をしたいものと、如來さまにお馮り申しまして居りましたが、旦那さま聽いて下されませ、親の心子知らずで、有らうことか有るまいことか、人を殺して福島を逃げましたとやら、それがため福島の親分にも疑ひが雜り、親分も到頭福島を逐天して行方知れずになつたさうでござりまする。」

「お話しの方ではござるが、今申された行方知れずになつた、福島での親分といふのが、岐阜に落着いて二代目の鳥羽屋半七となつて、此處に見えた婦人が即ち半七殿の御内儀でござる。」

「えッ、まあ然うでござりまするか、それでは悴の爲には大恩ある親分のお連ひでござりましたか、存じませぬこととて先刻から御無禮ばかり、お許し下されませ。」  
「何のまあ、そのお詫びに及びませう、便りに思ふ權次どの、父公に會ふといふも何かの因縁でござりませう、豫ねく灘と承つて居りましたが、怎うして斯ういふ所にお住ひでござりまする。」

「ま、お聞きなされませ、さういふ悪い悴の評判が灘一杯に廣まりましたので、世間の人に顔向けもなりません、家は勿論田地畑まで賣拂ひ、斯んな處に引込みまして、難澁する人と見てはお助け申しますのも、悴の罪が少しなりと亡びますやうとの親心でござりまする、とも知らず、悴は相變らず悪事を働いて居るかと思ひます」



と、悲しうてなりましたね。」

「御心遣ひの段々、充分推察致し居るして、權次どの、外に身奇りはござらぬか。」

「權次の妹でお國と申すのが居ります、此子を産むと婆が亡くなりましたので、

里にやりましたから、權次の顔は知りませぬが、十六の年から大坂船場の尾張屋と

いふ油問屋に奉公中、若氣の到りて其店の番頭幸七と申します者と好い間になり

今では一軒持ちまして、幸七は尾張屋へ通ひ勤めを致して居ります。」

「それ承つて安堵致した、今日まで物語りも致さざりしが、權次どのと拙者とは

深い關係がござる。」

「でござりませう、先刻からの話して權次のことを能く御存知でござりまする故

お尋せうかとは存じましたが、差控へて居りました、一體、如何してお近付きにな

られましたか。」

「然ればでござる……。」

と、三國港以來の事を委敷物語り、後日知れては面倒と、おさんと不義の縁を結む

だことまでも打明けたので、甚兵衛は藤九郎の包隠しの無い所を喜むで。

「然うでござりましたか、迎も忤は疊の上の往生は出来すまい、斯うして名告り

合ふて見ますれば、お二人さん共繋がる因縁、失禮ではござりまするが、わたくし

は貴下方お二人を忤夫婦と思ひまするで、何時までも御逗留なされませ、田地こそ

澤山はござりませぬが、灘で賣つた田地の代金を少々は貯へて居りまするで、決して

て御心配なされませぬ。」

八〇

藤九郎は、蛤門の戦ひで受けた鐵砲疵のため、右手が思ふやうに働けず、神陰流

免許の伎倆でも斯うなつても仕様が無いので、斷然武士を棄てる氣になつて、おさ

んと共にズル／＼ベツタリ夫婦養子のやうな安排で、甚兵衛の宅に住つてゐる、其



兵衛も亦二人の身の上話して權次の恩返しにもと粗末にせず、夫養子を貰ふた氣で何一つの隔ても無く眞の親子のやうに暮すものゝ、坐して食へば山も空しの諺もあるので、年が明けてから、甚兵衛が娘お國の手蔓で量賣りの油屋を始めることにし、藤九郎は、夜は近所の子供を集めて讀書算術など教へて、至極平和な暮らしをして居る、それ以來何等の怪しいことも無く、人魂の出るといふ噂も無いので、武士を棄てたのでお澤の怨靈も浮かむだことゝ、藤九郎は大いに胸を安んじた、唯不思議なことは、誰れ憚らぬ夫婦のやうになつて居るおさんが、岐阜に居た時ほど藤九郎に親まぬことであるが、藤九郎は固より自から進むで仇な契りを結むだ譯では無いので、別段それを氣にするでもなく、側に居るのを邪魔に思ふでもなく、仲の悪くない男と女が寄台世帯を持つた位の、至極淡泊したもので、半一も恙なく成長するのであつた。

その年も推詰まつて大晦日となつて、甚兵衛が貸付て置いた金が諸方から返つて來たのが凡そ二百兩ほど有つた、年が明けると、正月の末から二月にかけて、又その金を貸付けて仕舞ひ、その内に家の普請も出來上り、大坂からも荷が着いたので三月の一日から油店を開くことになり、おさんは袴掛け、藤九郎は前垂掛けで、いそぐ働いて居る、愈々明日は開店といふ二月晦日の午餐前、突然甚兵衛に代官所から差紙が着いた、開いて見ると即刻出頭せよとのことであるから、甚兵衛は合點が行かぬから羽織を着替へて御用聽と一緒に代官所に出頭した。

藤九郎おさんは何事であらうかと、種々心配して歸りを待つて居たが中々歸つて來ない、如何したことかと藤九郎は代官所の近所で聽合せて見たが容子が更に知れぬ、その日も暮れて仕舞つて、甚兵衛の噂をしながら、おさんと半一を對手に夜食を濟まし、夜も彼是れ亥刻であらうかと思ふ頃、戸外で。

「甚兵衛さんく。」  
と、呼ぶ女の聲がする、藤九郎は不思議なことだと思ひながら、戸を開けると外は



一面雪が積つて眞白い、顔色の青褪めた元氣の無さうな、二十二三の女が悄然立つて居る。

「甚兵衛どのは留守でござりまするが、貴姐は何人でござりまする。」  
女は留守と聽いて力を落したやうに。

「甚兵衛さんは留守でござりまするか、あゝ、残念な」と、寂しい聲。

「何方からお出でになりました。」

「唯、妾は大阪の女でござりまする、甚兵衛さんに子供のことをお頼みせうと思ふて來ましたが、お目に當らいで残り惜しうござりまする。」

と、言つたきり、藤九郎が瞬きした間に、女の姿は何方へ行つたか無くなつた、藤九郎はズツとして、戸を閉めて以前の座敷に戻つて來ると、佛壇の鉦が自然でチーンと鳴つた。

「氣味の悪い晩ぢや。」

と、藤九郎が獨言いふに續いて。

「今のは誰れでござんした？」

と、おさんが氣遣ふて問ふ。

「大阪の女と言ふたが、話しをする内に居なくなつた。」

「へー。」

と、おさんは一縮みに縮みあがつた。

八一

夜が明けても甚兵衛は戻つて來ない、藤九郎おさんは氣が進まぬながら、朝餉を濟ました後、昨夜の女のこと氣になるので思ひ出したやうに、藤九郎は佛壇に燈火を捧げて、念佛を唱へて居ると、村の名主を先に組頭が四五人揃ふて來た、藤九



郎は座敷に請じて話しを聴くと、此頃京都の混雑に紛れて贖金を使ふ者がある、甚兵衛が貸出した金の中に三十兩ばかり、その贖金が混つて居たので代官所に引かれ、たとの次第が判つた、藤九郎は愕いて。

「甚兵衛どのに限つて、贖金を使ふやうなことは、決してござらん、何とか助ける工風はござりますまいか。」

「それで御相談に上りました、甚兵衛どのとは永らくの交際で、然ういふことをする人で無いことは、一同能く承知して居ります、そこでお下渡しになりますやう組合から代官さまに歎願書を差出さうと存じまして、それで御相談に上りました」と、名主の言葉。

「御親切に忝うござる、皆さまのお力で、然うなりますれば誠に仕合はせます。」  
「組合の衆とも相談致しましたが、その歎願書でござります、わたくし達は筆不重寶でござります、貴下にお認めを願ひ、組合連印で差出さうと、斯う相談が

出来ましたが、一つお認め下されませんか。」

「それは容易いこと、舅同様の甚兵衛殿の一大事でござりますから、如何やうとも認めませう。」

「何分急ぎますから早速お認め下されませ。」  
「承知致しました。」

と、料紙硯を取寄せ、名主五人組とも、種々文言など相談して漸く一通の歎願書を記了げた、名主は讀上げる、組頭にも異議がないので、所持の判をベタ／＼押しておるでなされませ。」

「誠に有難う存じます、何分宜しく願ひます。」  
と、藤九郎はおさん共々、一同を見送つて。

「困つたことが起つたな、今日から店を開かうといふ矢さき、何といふことだら



う。」

「眞個に縁喜の悪いことでござんすな、佛さまのやうな慈悲深い甚兵衛さんに、斯んなことがあるとは、神も佛も無いやうなものでござんすな。」

「一寸先は闇といふが、その通りだ、それは然うと合點のゆかぬは昨夜の女、子供の事を依頼に來たと言ふたが……」

「妾は氣味が悪くて、昨夜は碌々寝もしません。」

「然うであつたらう、甚兵衛どの、事も氣懸り、氣にすれば女の事も氣が、りの此の儘では店も開かれず困つたことぢや。」

と、二人が話しをして居る所に、下男體の男が誕生過ぎ位の子供を抱いて。

「甚兵衛さんのお宅は、此方でござりますか。」

と、戸外で尋ねる、藤九郎は子供を見た瞬間、之れだなと思はず愕然として。

「甚兵衛殿の宅ではござるが、甚兵衛殿は留守ぢや。」

「へー、甚兵衛さんが留守とは困りましたな、併し、手紙も付いて居りますから、此の子供衆を預かつて下さい。」

と、一通の封書と背に擔ふた風呂敷包を卸して、子供と共に渡さうとする。

「預るといふても、甚兵衛どのが留守では、預る譯にもゆかぬが、一體何所から來なかつた。」

「吹田から參りました。」

「昨夜の女は大阪と言つた、子供を連れて來た男は吹田といふ。」

藤九郎は一寸惑ふた。

八二

「吹田とは合點がゆかぬ、まあお掛けなさい。」

と、男に腰を上り櫃に掛けさせて。



「大坂なら少し心當りもありますが、吹田では判りかねる、その子供は何所の子供でござる。」

男は子供を揺りながら

「委敷いことは知りませんが、大坂の尾張屋の若御寮人が、吹田の別荘に出養生をして居られましたさうで……」

「尾張屋と言へば、船場の油問屋でござるか。」

「唯、然うでございます、此方の娘さんちやさうで、お國さんといふのが、今朝わたしを呼むでの話しに、若御寮人が昨夜急に工合が悪くなられたから、此の子供衆を一時預けて来てくれと、このやうに手紙を添へて依頼されましたので、仕事を止めて参りました、委敷い事は手紙に書いてありますから、子供衆は預かつて下さいこれから歸つて畑を一枚打たにやなりませんから。」

お國といへば甚兵衛の娘、乳の無い事を承知で預けるとは、定めし事情の有るこ

とであらう、又昨夜の女の事もあるので、其内甚兵衛が歸つたら、話しが着かうとおさんとも相談して

「何を言ふても甚兵衛どのは留守であるが、お國どの、使者とあれば、兎に角子供は當分預りませう。」

「それでわたしも助かります、委細は手紙に在りますから、御覽になれば譯は判ります、宜敷くお依頼致しまする。」

と、子供を渡して男は歸つた。

藤九郎は子供をおさんに抱かせて、能く見ると可愛らしい女の兒、風呂敷包には子供の着換へやら襦袢が澤山取揃へてある。

「わたし達が斯うして居れば可いやうなもの、甚兵衛さん一人であつたら、嘸お困りでござんせう。」

「それを承知で預けるのちやから、深い事情が有るであらう、と言ふて甚兵衛どの



宛の封書を開く譯にもならず、歎願書が出たから、甚兵衛どのも歸つて見やう、風邪引かさぬやう育てるが好い。』

と、二人で粥を炊くやら、摺粉を摺るやら、店を開けば大切な元方の兒であるから大切に扱ふのである。

その日も暮れたが、甚兵衛は歸つて來ない、藤九郎は半一、おさんは尾張屋の兒を抱いて枕に着いた。

夜半過ぎにおさんは子供を寢せ替へる積りで、よひいと頭を上げると、子供の枕上に、瘦衰へた二十二三の女が坐つて居る、子供は夢でも見るのかスヤ／＼寢ながら笑顔を造つて居る、ハツと思ふ間に女の姿は消えて仕舞つた。

おさんは藤九郎を起さうかとは思つたが、お澤のことを思ひ出さすでも無いと、何にも言はず夜を明かし、それから二日経つても三日経つても、甚兵衛は歸らず、女の姿は毎晩出る、三晩續いて其たので、おさんも耐りかねて、有りし次第を藤九

郎に打明けた。

話しを聞いた藤九郎は、冷水を浴びる心地で。

「子供の來る前の夜に、子供を依頼に來たと言ふて消えた女と、毎晩出るといふ女の姿は寸分違はぬ、それでは其の子の母親の幽霊かも知れぬ、甚兵衛の歸るまでは封書は開けず、甚兵衛の歸るは何日とも知れず、諾矣、吹田に行て尾張屋の別荘と訊いたら知れやう、お國どのに會ふて容子を聴かう。」

と、草鞋を穿いてテク／＼吹田へ赴いた。

大坂の油問屋では、有名な尾張屋の別荘であるから、吹田に着くと直知れたのでお國を訪ふたがお國は留守で、別荘守から仔細を聴くと、此に大事件が起つて居た

八三

船場で一と言はれる、油問屋尾張屋の主人は久左衛門といふ、年は丁度五十年で



あるが、三十五六の時に妻を亡ふた、その妻の中には久太郎といふ子があつた、その時久太郎は十歳許りであつたが勤める人の有るに任せて、姿色好みから連子のあるお富といふ二十四五の後妻を迎へた、連子はお常といふ六歳になる娘であつた年を重ねて久太郎は二十になつたので、伊丹の酒造家、大口屋多右衛門の娘お米といふを嫁に迎へ、嫁入の荷物が五十荷あつたといふ素晴らしい婚禮であつた、最初の間は家内は平穩に何の風波も無かつたが、如何した拍子で狂ひ出したものか、年にも耻ぢず、五十近くなつた久左衛門は、京都島原の柏屋の太夫白扇を思ひ初め、大坂から三日に擧げず通ひ出したので、家内に漸く波瀾が起りかけた。

尾張屋の番頭に儀助といふ番頭がある、奉公に来てから未だ三年餘であるが、小才が利いて萬事に抜目が無いので、久左衛門が引上げて番頭にしたのである、口邊のキリ、と締まつた、眼邊の苦味走つた所が後妻お富の氣に入つて、久左衛門が島原通ひを始めてから、何日となく人目を偷む好い中とはなつたのである。

斯うなると慾には慾が加はるもので、お富は此の身代を自由に掻き廻したく、儀助と腹を合せて、久左衛門を煽動して、島原通ひを盛んに勧め、一方は久太郎を教唆かして、連子のお常と結び付け、機が有つたら嫁のお米を離縁して、お常を後に直さうとの魂丹を運らし、巧みに久左衛門親子を籠絡して居る。

久左衛門は开んな計畧に陥められるとは知らう筈なく、島原に切々と通ひ、金銀を湯水のやうに費消して、大盡遊びをするのであるが、肝心な白扇が、何としても久左衛門の思ふ儘にならぬ、ならぬと言ふは、白扇には伊之さんといふ情夫があつた他の男に肌は許さぬと堅い起誓を取換して居るので、久左衛門に靡かぬは無理でもない、それと知つた久左衛門は、早晚その伊之とやら男を捕へて充分耻ぢを搔かせて與らうと、翫間を味方にして其の機會を覘ふて居る。

伊之さんといふは、金津紀の國屋の息子の伊之助である、權次の最後を見届けやうと、長らく江戸に逗留して居たが、涙橋から逃げたので、又廻り逢ふときも有ら



うと、姉を伴なひ中仙道を越前に取つて返し、母の容子を尋ねると、病氣は全快して居るので安心はしたものの、今度は母親が旅立ちの暇をくれず、又軍刀齋から敵討は天下の御法度と言ふて聽かされたので、敵討は思ひ止まり、見付けたら訴へるまでと心を改め、母親の勧めに随ふて、それから以前取引して居た西陣の織元、加世半齋の店に奉公して、今では手代に引上げられ、最ふ二三年すると番頭にされるまでに半齋から見込まれて居るのである。

伊之助は主人半齋の命令で、朝から下京を一廻りして掛金の集まつたのが五百兩餘り、ドツシリとした革財布を後生大事に懐に入れ、六角堂まで来たのは、年も押し詰まつた十二月十七日の黄昏時、納め観音として非常な参詣、伊之助も明暮に父の菩提に観音菩薩を信仰してゐるので、好き日に來合はせたと、歩みを移して禮拜を遂げて六角堂を出やうとすると、丸八といふ島原の幫間が、酔ふた機嫌で門を潜つたので、見つけられじと人込に隠れんとしたが遅かりし。

「逃げ隠れとは卑怯く、丸八疾くに見て取つたり。」  
と、追従つて袂を捕へた。

八四

伊之助は失敗つたとは思へども今更及ばず。

「丸八、今宵は勘忍して與れ、明日の晩は必ず行かう。」

「などと其手は桑名の焼蛤、この四五日貴下の顔が見えぬといふて、太夫さんは座敷にも出ず寝たきり雀、切望貴下に會はれるやうにと、明けても暮れても神佛、依頼みますると依頼まれて、観音さまへ代參のこの丸八、その観音さまの眞前で、お目にかゝるは佛の御利益、太夫さんを喜ばせるも一つの功德、丸八も浮かびまする然ういはずとお出でなされませ。」  
と、口から出任せの追従だらく。



伊之助は五月蠅氣に。

「太夫が病氣と聽けば氣にもかゝるが、今宵は少し黄金も持つて居るほどに、早う歸ねばお店の首尾も悪い、今宵の所は見遁がして、太夫にも能う言ふてたも。」

「開闢以來の初耳、黄金の花を咲かす廓、金が無いゆる行かぬといふは理窟に合ふが、有るゆる行かぬと仰有るは、丸八を煩悶さうでござりませう、罪ぢやぞえ、これ伊之助や。」

と、巫山戯た身振り。

「何と言やつても、今宵は行かぬ、行かれぬ〜。」

と、振切つて往かんとするを、丸八は放さばこそ、

「此の手が斯うしてお衣を握つたからは、日雷が鳴らうとも、離れることではござりませぬ、この儘此の手を放したら、貴下へ忠義は立ちますが、太夫さんへの義理が立たぬ、顔だけお見せなされませ。」

と、丸八は久左衛門からの薬の効験、連れて行かねば措かねの意地張り、伊之助は参詣人に顔見られるも耻しく。

「然う言やるなら、格子先まで……暖簾は屹乎滑らぬぞや。」

「それで下拙の心願成就、太夫さんの病氣も即座に平癒疑ひなし、さあ、お越しなされませ。」

雪はちら／＼降つて来た、二挺の駕籠は高原の大門口へヒタと止まつた、柳は枯れて軒行燈の光りも淡く、爪弾の音も寂しき霜枯時、角屋ばかりは二階一杯灯が射して、師走知らずの大盃遊び、此處ぞ久左衛門が華奢に金撒く戀の本陣。

「これは伊之助、太夫さんがお待ちかね、早うお上りなされませ。」

と、伊之助は無理無體に引張り込まれた奥二階。表二階の座敷では、俄に白扇が俄かに居なくなつたので、久左衛門は不興面。

「太夫は如何した、何處へ往た。」



駈付けた幫間丸八、忠義顔で久左衛門の側にズイと寄り、耳に口當て何やら私語久左衛門は首肯いて。

「伊之が来たか、それで太夫が消えたのちや、言ひ分がある、伊之の座敷へ案内せえ。」

と、早立ちあがる。

仲居は飛び立ち。

「まあ〜お待ちなされませ、今に太夫さんも見えますほどに。」

「いや待たれぬ、太夫が居ねば酒も不味い、戀の意氣地ぢや、伊之とやらが面の皮引剥いてくれる、皆の衆、來やれ〜。」

と、先に立ち、長い廊下を酔ひしれた足取り危く、奥座敷を目蒐けて行く、藝妓幫間も。

「そりやこそ變事ぢや。」

と、口には言はねど、思ひ〜に尾いて行く、障子の外で耳を濟ますと、白扇の聲として。

「如何やら身請の相談が出来たらしい、若し然うなつたら、妾は生きて居ぬ覺悟、伊之さん、未來は夫婦でござんすぞへ。」

久左衛門は怒りの顔色、眼を血走らせて、留める幫間を握と突退け、障子をガラリと押開く、二人はバツと離れて久左衛門の姿を見上げた。

八五

久左衛門は伊之助を睨付けて。

「伊之とやら犬とやら、他の買ふた太夫を横間から、咬へ出すとは横道漢、盗人だ色盗人だ、何とか挨拶して貰はう。」

「若し旦那さん、物も言ひよで角が立つ、盗人呼ばはりは餘りでござんせう。」



と、白扇は伊之助を擁護ふ。

「何が餘りだ、丁稚上りの冷飯喰ひ、尾張屋の向ふを張るとは職過ぎる、女郎を買ふなら金で買へ、俺が金で擧げた太夫、指でも支したら承知せぬぞ」

白扇は久左衛門の傍に寄り。

「妾が悪うござんした、今宵の處は勘忍して下さんせ」

「其方が謝罪する理由は無い、やい、伊之！何とか挨拶して貰はう、買ふた女を横取りされ、指を咬へて引込むでは尾張屋の男が立たぬ、奉公人の分在なら、女郎買ふ金は持つては居まい、金が有るなら俺に劣らず費ふて見い、時と場合ちや男づく、譲つて與るまいものでもない。」

伊之助は拳を握つて口惜しがる。

丸八はシャ／＼り出で。

「尾張屋の旦那さま、滅多なことを仰有ります勿、伊之旦那は金持ちでござります

る。」

「金が有る？」

と、久左衛門は冷笑ふ。

「道々も、金が有るゆる行かぬと仰有るを、無理にお供致しました、その金を費はれたら、貴下の敗北になりませう。」

「金が有るゆる行かぬとは、ハハハ、然うであらう、金は金でも主人の金か、使へぬ金なら瓦も同然。」

と、久左衛門は白扇の朱羅字の長煙管を取上げて、

「金が有るなら使ふて見い、使へる金か使へぬ金か、金を見せえ」

と、煙管で伊之助の胸をピツシリ殿くと、ザクリと鳴つたは黄金の音、

「ハハ、金らしい、男なら使ふて見い。」

と、言ひながら自分の懐から取出した小判三百兩、蠟燭の明りに光る山吹色。



「金は斯うして使ふもの、拾へ〜。」

と、立あがつて、藝妓詰間の中央へ、バラリ〜と撒きちらす、慾には目の無い翳間共、女を突退け吾れ一と争ふ状は、鼎の湯玉と沸るやう。

「如何だ、斯ういふ真似は逆も出来まい、出来るなら行つて見い、これは礫か瓦の破片か。」

と、又もや烟管でピシリと打つ。

伊之助は忍耐しかねて顔色は青褪め。

餘りとしても悪口雑言、石か瓦か、性根を据えて能く見居れ。

と、懐から引出した財布の紐をクル〜解く。

白扇は吃驚して其の手を押へ。

「もし、伊之さん、短氣なことを爲しやんす勿、その金に手をつけて、萬一の事の有つた時は、何と言譯爲しやんす。」

「留みやる勿今でこそ、店奉公はして居れ、越前の金津では、他に知られた紀の國屋の總領息子、三百や五百の金に屈托せうぞ、黄金で面を張られたからは、張り返すため黄金撒かう。」

と、よろ〜ツと立ち立つて。

「拾ふた〜。」

と、又も小判を座敷一面に撒きちらす。

久左衛門は愕然として、長坐をしては面倒とや、坐を起しながら減らす口。

「孰れ生命と釣替への金であらうが、奉公人には好い度胸、その度胸を見せられては、尾張屋久左衛門も後へは退けぬ、今度来る時、千兩箱を持つて来やう、皆の衆座敷へ戻つて飲直さう。」

と、出で去つた。

後に残つた白扇は、氣遣はし氣に伊之助に摺寄つて。



「伊之さん、何といふことを為しやんす、お店の金ではござんせんかえ。」

「濟まぬことちやが此場の意地張り……」

「まあ。」  
と、白扇は青くなつた。

八六

伊之助は尾張屋久左衛門に耻しめられた口惜しまぎれに、無分別にも主人の金を三百兩、桔梗屋の二階で撒きちらしたので、今更主人に申譯のしやうも無く、死ぬより外に仕様は無いと覺悟を定め、夜明けぬ内にと島原を出で、桂川に身を投げんと雪を明りに、七條通りを一散目に駈けて來ると、一人の若い男が今や身を投げんとして居るので、馳寄つて後から抱き止め。

「待ッしやれ、身投げするとは無分別、死なねばならぬ譯は有らうが、早まつ

たことなされます勿。」

「切望、死なして下されませ、死なねばならぬ譯がござりまする。」

「死なうと覺悟なさるには、譯が無うてはならぬ筈、然ういふて留めるわたしも、誠は死ぬる覺悟で來たもの。」

「えッ、貴下もお死になされる覺悟で。」

「わたしは何を匿しませう、主人の金を使ひ込み、所詮生きては居られぬ體、二人が二ツの生命を棄てうより、成らうことなら、わたし一ツの生命に引受け、貴下の生命が助けたさに、それでお留め申しました。」

「御心切なお志しは忝うござりまする、わたくしは大坂の油問屋、尾張屋の忝久太郎と申しまするもの。」

「るッ。」

と、伊之助は驚いたが、久太郎は氣も付かず。



「油の代を集めまして、丹波口まで来ますると、烏散な男に突當られ、あつと言ふ間に財布を奪られて仕納ひました。」

「それはまあ、偉い災難でござりましたな。」

「父久左衛門は島原通ひに身を持ち崩し、店の事は番頭任せ、母と申しても繼しい中、唯奪られたでは済みませぬ故、それで死なうと覺悟をしました。」

「御尤なお話し、身に詰まされて無理とは思ひませぬが、奪られたとお話しの、金は幾許でござりますか？」

「丁度二百兩ござりました。」

「あの二百兩？」

と、伊之助は暫らく目を閉ぢて考へて居たが、一ツ大きく首肯いて、

「それなら貴下はお死になさるには及びませぬ。」

「とは又何故でござりますか？」

「今も申しました通り、使ひ込むだ主人の金といふは、掛を集めた五百兩餘りの内の三百兩、此に残りが二百兩餘りござりまする、これを貴下に差上げますゆゑ、奪られた金と思ふて持つてお歸りなされませ。」

「滅相な言仰有りませ、看すく貴下を死なせて置いて、如何して此の金が戴かれませう。」

「否々、然うではござりませぬ、五百兩の内三百兩使ひ込むでは生きて居られず、死ぬる身には用らぬ金、遠慮無く持つて往て下されませ。」

「ちやと申しまして。」

「然うして下さると、此の金も役に立ち、二ツの生命が一ツで濟む譯、此點聽判けて取つて下され、思ひ出された其の時は、一遍の回向を只管依頼みます。」

と、起ちあがり抱止める間も無く、身を跳らせて桂川へザンブと沈むだ。久太郎は財布を握つて、川の面を久しく見詰めて居たが、浮き上がる景色もなく



水は静かに流れて、又もや雪は霏々降つて来た。

八七

久太郎は思はぬ金が入つて、生命拾ひはしたものの、氣急ぎの時として國所を問ふでもなく、名さえ訊く間が無かつたので、濟まぬくとそれが氣が、り、帳場（首尾は都合良く納まつたが、其の日から何となく齟齬ぎ込むやうになつた。）

枕を並べて伏せつた嫁お米は子供に乳房を含ませながら、

「顔の色も酷う悪い、如何か爲やんしたかえ。」

「氣遣ふてくれる勿、餘計なことに氣を揉むで、乳でも止つては子供が可哀相、何ともない〜。」

「何とも無いと言はしやんしても、今日戻らしやんしてから、氣も浮かぬ氣な心配顔、お父さんは宅を外、お母さんは繼しい仲、便りに思ふは貴下ばかり、隠した

てせず何故打明けては下されませぬ。」

と、恨み泣き、

「あゝ悪かつた許してたも、何を匿さう。」

と、四圍を見廻はし。

「今日持つて来た金は他人の金。」

「ゑッ。」

と、愕くを制へて。

と、言ふて、盗み詮傷をした譯では無い、實は……

と、桂川での次第を物語り。

金まで與れて、わしの代りに死んだ人の、處も聽かず名も聽かなんだが心懸り、氣の浮かぬのもそれが爲、必ず悪う思ふてくりやん勿。」

「然ういふ譯でござんしたか、お母さんは日に増し邪慳な仕打ち、小姑のお常さん



の素振りも合點が行きませぬ故、女の浅い心から、ひよんな方に氣を廻はして、耻かしようござります、切望、許して下されませ。」

「何の許すも許さぬもあるものか、母さんに知れては面倒と思ひ、匿して居たのがわしの誤り、併し誰れにも言やん勿や。」

「そのやうなこと、何で他に言ひませう、貴下の生命を助らしやんしたは嬉しいが死んだ人が氣の毒でござんすな。」

「それを思ふと、斯うして居ても氣が安まらぬ。」

若夫婦は寢物語り、何時眠るともなく一寢入り、したかと思ふと、お米が。

「キヤツ。」

と、魂消る聲に赤兒は泣き出す、久太郎は眼を覺まし。

「如何したく。」

と、行燈を挿立てると、お米は胸をドキ／＼させて、生際には油のやうな汗を發い

て、捜し物でもするやうに、部屋を見廻す許り。

「お米、お米。」

と、久太郎が二聲かけると、氣が付いたらしく。

「唯。」

と、ばかりで、尙も付近を見廻す。

久太郎は煙管に火を吸付けながら。

「夢でも見たのか。」

「唯。」

と、未だ働悸は納らぬらしく。

「貴下は何ぞ見てはござんせぬかえ。」

「何にも見やせん。」

「今、此處に誰れぞ來やませぬかえ。」



「お前、寝呆けては居らぬか、この夜半に、他の寝間に來るものが有るものか。」  
「それでも只今、ビシヨ濡れになつた人が、入つて來ました。」

「ゑッ。」

と、久太郎も流石に氣味悪く、頭を上げて見ると、思ひなしか行燈の側の疊が、人の立つて居た跡ほど濡れて居るらしい、氣味の悪さに夫婦は寝もやらず、話に紛らして夜を明かした。

それからお米は病みついて、醫者よ薬と手當に怠りは無いが、容體は重るばかり久太郎の心配に引替へて、後添のお富母子は手を拍つて喜んだ。

八八

後添のお富は年にも耻ぢず、今朝も時刻に厭ひなく、鏡臺の前に坐つて、紅を塗けたり、白髪を抜いたりして居る所へ、番頭儀助が。

「御許しなされませ。」

と、入て來た。

お富は振りかへり。

「おう、儀助、何ぞ用かえ。」

と、馴れ／＼しい。

「唯、島原から、又金寄せでござりまする。」

「困つて仕舞ふな、好い年をして遊女狂ひ、大體に爲なされば可いに、幾許とも言ふて來ぬかえ。」

「金の高を言ふては參りましたが、餘り大きうござりまするで、御相談に上りました。」

お富は鏡臺を突遣つて。

「こちらに入りなされ、大きいとは、幾許といふて來ました？」



儀助は部屋に入つてお富と向合ひ。

「千兩と言ふて参りました。」

「何ッ、千兩ッ、まあ何に爲なされることやら、呆れて仕舞ひます、この節季師走に何といふことであらうな。」

「わたくしも、種々考へて見ましたが、何にお使ひなされるやら、薩張り譯が判りませぬ。」

「白扇とやらを請出さうでがなあらう。」

と、一寸嫉まし氣にも言ふたが、儀助の眼と眼が出會つたので、笑顔に紛らせ。

「對手が對手なら、なあ儀助……」

と、意味ありさうに、儀助の顔を窺視る。

「何を仰有りますやら。」

と、儀助は故意と空徒呆け。

「折角の仰有付けでござりますゆゑ、送らぬ譯にも参りますまい。」

「金は有りますかえ。」

「四五百なら、小出しの方にもありまするが、千兩となりますると、土蔵から出さねばなりません。」

「使ひただけ使はすも可からう、意見などして格氣と思はれるも合はぬ話し、なあ、儀助。」

「それも然うでござりまする、大旦那も、時節が来れば治りませう。」

お富は思ひ出したやうに。

「治ると言へば、彼のお米ぢや、お正月にも間も無いのに、寢付かれて困つて居るが、今の内に吹田の別荘に行つて仕舞はうと思ふが、儀助、都合好う計らふておくれ、あたしや、邪魔になつてく、顔を見るのも癪に障つてならぬわいな。」

「然うでござりまする、當分、吹田に押込めて置いて、そろく離縁の段取りにし



ましたら、お常さまも、お喜びでござりませう、好い處にお氣が着かれました、出養生といふ名目にすれば、若旦那にも否やはござりますまい、それから先は、お常さまの腕次第……』

『これ、餘計なことを言はしやん勿』  
と、矯めて。

『何分頼む、开んなら土藏を開かせう。』

と、鍵を取つて儀助と共に、廊下傳ひに土藏を開いた。

儀助は手代の手を借りて、千兩箱を抱へ出し。

『久し振りに抱へましたが、随分重たうござります。』

『お前が来てから、千兩箱を出すのは、今日が始めてぢやが、お前も千兩箱を持つたことがあるかえ。』

と、お富は何氣無く突込むだ。

『るッ。』

と、儀助はギツクリ詰まつたが、更に氣を變へ。

『へへへ、これでも以前は、二ツや三ツ、保つた時節もござりまする。』

と、戯談に紛らかす、おさんも手代も笑ふたので、戯談で濟むで仕舞つた。

千兩箱は儀助の指圖で、手代太助が宰領になつて、手替り付きで四人の人足が、ウントコなど擔ぎ出して、島原桔梗屋へ運ばせた。

八九

久太郎は戀女房のことゝて、何時までも本宅に置いて、お米の介抱がして與りたかつたのであるが、父久左衛門は後添お富の言ひなり次第で力にならず、お富を首め番頭までが、出養生と言ひたて、別居を迫まるため、心ならずも生木を割かるゝ心地で、當分の別居を餘儀無く承知した、お米とても久太郎の側が離れたくはなか



つたが、久太郎が承知の上は是非もなく、泣きの涙で吹田に引き移つたのは、その年も押詰まつた師走の二十八日であつた。

付添ひとしては、甚兵衛の娘で番頭幸七の女房お國と、下女と下男とが二人宛來たきり、別荘守の老人夫婦を合せて八人、廣い別荘で寂しい生活をする事になつたが、お國が陰陽無く立働きの、姉妹でもあるかのやうに、實意を盡して慰めるので寂しい中に憂ひを忘れる時もある。養生專一に赤兒を育てる。

正月中は、三日に一度四日振りに一度、來られぬ時は手紙を持たせて使者を遣つたりして、お米を慰めて居た久太郎が、二月になつてからは、唯の一度姿も見せねば通信も無し、病氣どもではあるまいか、旅行にでも往つたのかと、案じてはお米から手紙を送つても、梨の礫で返辭が無い、お米は身も世も在られぬ思ひ、お國を對手に明けても暮れても、愚痴を呷さぬ日は無かつた。

本宅の方では、お富母子は厄か神を追出したやうに喜むで、連子のお常は髮化粧

にも一層心を盡して、誘ふ水あらばくと、仕向けるのであるが、父親には似ぬ律義な久太郎は、お米へ情を立て、振向きもせぬので、お富儀助の兩人は、私かにお常の意氣地無きを口惜がつた揚句お米離縁の計略として儀助の智慧で、出入りの醫者大井周庵を取込み、お米の病氣を癩病の初期と診断させた。

それはお米が初産のため、非常な難産で、頭の髪が抜ける随つて眉毛も薄うなつたので、素人ではあり世間見ずの若旦那ではあり、産のためには斯うしたこともあるといふことを知らぬに乘み、周庵から故意と内密と冒頭して、久太郎に吹込ました、それに續いて、病氣の治るまで來てくれるなど、お米からの偽手紙を届けるやら、お米に愛憎を盡かすやうくと仕向け、お米から來る手紙は、儀助が店で引裂いたり、焼棄てたりして、茲に若夫婦の間は美事に引離されて仕舞つた。

他の事とは違ひ、癩病とあつては、如何に思ひ思はれた仲でも、久太郎としては考へずには居られない。



「治るまで来る勿といふは、眉毛でも抜けて仕舞ふたのか、眉毛は剃るから判らぬとしても、睫毛が抜け、頭髮が抜け、あの奇麗な顔が紫色に膨れあがつて、膿血がだら／＼流れるやうになつたら如何であらう。」

「……、想像して見ると、内氣な久太郎は、ブル／＼と身震するほど、怖くもなり忌にもなつた。」

機會を見計らつて後添お富は、久太郎の部屋に来て見ると、茫然として考へ込むで居るので、思ふ壺に陥つてゐると會心の笑みを含むで。

「久太郎、何を考へてゐなさる、又嫁女のことを心配か、措きなされ／＼。」

と、言ひつゝ火鉢の側に座る。

久太郎は狼狽へたやうに。

「これはお母さん、何もお米を考へたのではありませんが……。」

「戀しい女房のことぢやもの、考へるも無理はない、案じて與りなされ、おやがのぬが、周庵さんから薄々聽けば、嫁女の病氣は忌な病氣ぢやさうなの。」

九〇

今も今として、其事を考へて居た久太郎は、腹の中を見透かされたやうな氣がして

「唯、そのことは周庵さんから聽きました、困つたことぢやと案じて居りまする。」

「他の病氣なら我慢もなるが、この病氣は、孫末代までの瑕疵ぢやでな、家の爲を思へば案じられます。」

「……………」

「成さぬ中の妾の口から、斯んなこと言ふと、可笑う思ひなれうも知れぬが、家の爲には換へられぬ、今の内に縁を切つて仕舞ひなされ、出來た兒は仕方が無い、親知らずで他所に與つて仕舞へば、宅の血筋は汚れはせぬ、久太郎、斷念りなされ。」



「……………」

「今は綺麗な顔ではあるが、病気が段々甚うなつて、あの顔が蛾墓の脊のやうに腫れあがり、目が潰れ、鼻が崩れ、唇が缺け、紫色になつて、膿がジク／＼、血がダラ／＼流れ出しても、其方は女房と思はしやるか、おう怖……………」

「もふ、言ふて下されます勿。」  
と、手を合せて伏込むだ。

「言ふ勿とならば言ひませぬが、久太郎、依然女房と思ひますか、腹こそは痛めねど、斯うして親子と名が就けば生むだ子も同様、其方の爲、又家の爲を思へばこそ氣に入らぬことも言はねばならぬ、お米一人が女ぢやない、立派に断念つて仕舞ひなされ。」

「……………」

「返事のないは、断念らめらぬれのかえ、家の爲を思ふて此ほど言ふのに。」

と、泣伏して居る襟髪取つて引起し。

「あら、男の癖に泣いて居る、悪いことは言はぬ、断念りなされ、家の爲ぢや。」

「唯。」

「唯とばかりでは濟みませぬ、唯と言はしやつたから、断念める積りであらう、断念めたら、離縁状を書かしやれ。」

「は、離縁状を？」

「断念の就いた時書いておかぬと、時が経てば未練が起る。」

「……………」

「書かしやらぬか、血筋には代へられぬ、否が應でも、父さんに成換はつて書かせます。」

「お母さん、そりや餘り酷うござります。」

「何が餘りぢや、何が酷い……………あ、判かつた、離縁状を書かしやらぬは、繼母ぢや。」



やと思ふて、妾への面當てぢやな。」

「め、滅相なこと仰有りませ。」

「开んなら書かしやれ。」

「……………」

「書かしやらぬか。」

「……………」

「るゝ、もふ言ひませぬ、繼母ぢやと思ふて莫迦にしてゐなさる、はい、出て行きます、お常を拉れて出て行きます、その後、癩患者を入れて、好きに爲なされ、今日限り出て行きます。」

と、お富は氣色を變へて立ち上る。

久太郎は火鉢越しに其の袖を捉まへたので、鐵瓶が覆つて灰神樂がバツと揚がつた、にも拘はずお富を引止め、

「書きます、書きます、可哀相だが、家の爲には代へられませぬ。」

「其點に氣が付けば、言ふことはござんせぬ、又も未練の起らぬうち、早う書かしやれ。」

と、お富は自分で硯の磨り流し、久太郎の前に推付けた。

九一

明日は朔日といふので、お米はお國に髪を結はせ、久し振りに顔から襟筋にも剃刀を當て、一風呂浴びて鏡に向つて淡化粧した所は、病上りの瘦が見えて、抜けるほど好い姿色、手傳ふてゐるお國は惚れくと眺めて。

「お身美しうござりますな、若旦那さまに、お見せ申したうござります。」

お米はサツと耳朶を赤うして、

「お國は、まあ、何を言やる、开んなこと言はれると、妾、極りが悪い。」



「とんだ失禮を申しました、御免なされませ。」

「若旦那といへば、今月になつてから一度も見えず、手紙を上げて返事は来ず、案じられてならぬわいな。」

「若し御病氣にしても、お便りくらゐは、有りさうなものでござりまするな。」

「それが無いゆゑ、案じます、明日まで待つて便りが無かつたら、大儀ながら、船場まで往ておくれ。」

「唯々、お易い御用でござりまする、緩々御容子を訊いて参りませう。」

と、二人が話しをして居る所へ、別荘守の老人が。

「お店からお手紙が参りました。」

と、一通の封書を差出した。

お國が請取つて見ると、久太郎の手であつたから。

「若旦那さまからでござります。」

と、お米に渡しながら。

「お使ひは待つて居ますかえ。」

老人は次の間から。

「否、そのお手紙を置いて、直去なれました。」

「あゝ、まあ、御返事ぐらゐ、聽いて行けば好いの。」

お米は懐しげに一寸戴き、封を截つて開いて見ると、思ひも寄らぬ三行半の離縁状

「やゝッ。」

と、愕きながら、讀違ひかと自分の目を疑ふて、再び讀み直しても離縁状であつたので。

「はあッ。」

と、太い息を吐いて頷垂れる。



お國は差寄つて氣遣はし氣に。

「何を變つたことでもござりますかえ。」

と、問ひはしたが、お米の舉動で何か事件が起つたとは推察して居た。

お米は手早く離縁狀を袖に匿して、總身をワナ／＼慄はせながら。

「あゝ驚いた、國や、水を一ツおくれ。」

「唯。」

と、お國は次へ立つた。

お米は又も袖から取出して、繰返して見たが、紛れも無い久太郎の直筆。

「去られる覚えは少しも無い……。」

と、獨語を言ひかけた時、お國が湯鐘に湯呑を添へて持つて來た、急いで再び袖に匿し、素知らぬ顔で水を飲む、お國も容子が變なので推しても問はず、言はず語らずの間に日が暮れて、夜食の膳に就いてもお米の食は平日ほど進まず、物數も言は

ず、何となく沈みがちであつた。

雪が片々降つて來たので、戸締りも早くして、家内中早寢をした。

夜の亥刻でもあらうかと思ふ頃、車井戸が消魂しう鳴つて、ドボツと物の落らた音がしたので、お國を首め下女も下男も跳起きて、小燈で井戸を覗いて見ると、何やら黒い物が浮いて居る、お國はお米に報せる積りで、お米の寢間に來ると、子供はスヤ／＼寢て居るが、お米の姿が見えぬ。

「これは不思議。」

と、付近を見廻はすと、机の上に書置とした封書が一通あつた。

人を雇ふて死骸を引揚げる、本宅へ使者を出すやら上を下への混雜。

急報を聽いて朝早く駈着けた久太郎が、遺書を披いて見ると、離縁狀を封じ込むで怨み辛みを繰返し、子供を宜敷依頼むと筆が止めてあつた。



九二

葬式は本宅から出すことにして、死骸は其日の内に大坂へ運むで、夜は出入の者が多勢でお通夜をした、久太郎も其中に交つて夜を明かし、東の天も白むだ頃、表の戸を慌しう叩くものがある、出入の若衆がガラリ大戸を開けると、轉げるやうに飛込むのは、醫者の大井周庵。

「わ、若旦那は居られますか。」

と、大狼狽に狼狽た調子、久太郎は立ち上がつて。

「先生、何でござりまする。」

「おう、若旦那……水を一杯。」

と、後は言はず、胸を叩いてゐる、若い衆が酌むで来た水を一息に飲干して。

「時に若旦那、内々お話しが有つて参つた、別なお座敷を拜借したい。」

「御内談ならば。」

と、手燭を點して自分の部屋に誘ふた、周庵は動もすると後を振り返りながら、部屋に通つてもそわくして居る。

久太郎は行燈に灯を移し、火鉢の埋火を掻起して。

「御内談とは、何でござりまする。」

と、一寸居直る。

周庵は何だか後を頻りに氣にしながら。

「誰れも聴く人は有りますまい勿。」

「此處は二室限りで、次の室は誰れも居りません。」

「それでは話しますが、若旦那、愕いちや可ません。」

「先生、妙なことを仰有ります、愕か愕かぬか、お話しを伺つた上の事で……」

「ちやから、前以てお断りして置く。」



と、又も後を振り返つて見て。

「若旦那。」

「何でござります、氣味の悪い。」

「ぢやから、愕かれる勿と申して居る。」

と、言ふては後を振向いて見る。

「先生、わたくしは昨夜はお通夜で、まんじりとも爲て居りませんから、御内談は又にお願ひしませう。」

と、久太郎は少し憤としたらしい。

「然う言はずに聽いて下さい、實はな、若御寮人が拙者の宅に見えましたぢや。」

と、又も後を振向く。

「へーッ、先生、戯談仰有つちや困ります。」

「戯談ぢやござらぬ、眞實でござる、御混雑の中に何で戯談を申しませう。」

「それも然うでござりますが、何の怨みも無い先生のお宅へ行く筈が無いぢやござりませぬか。」

「處が、怨みが大有りでござります。」

「へー、如何した怨みが……」

「それで早朝参りました、極々秘密で誰れにもお話し下さる勿。」

「承知しました。」

と、久太郎は諄いと言はぬばかり。

「實はナ、若新造を癩病と診断したのは虚言……」

「へッ、それでも頭の髪やら眉毛が薄うなりましたが。」

「それは産後に能く有ることで、些とも不思議はござらぬ。」

「へー、然ういふものでござりまするか、それなら何故虚言を仰有りました。」

「さ、其點が御内談ぢや、實はな、番頭の儀助どのから依頼まれて、據なく虚言を



申したが、一昨夜と昨夜と二晩續けて、若御察人が拙者の枕上に來られて、此の辯解をしてくれねば、取殺すと言はれば時の怖ろしさ、思ひ出しても兢々致す。』

久太郎は。

「ハー。」

と、溜呼吸吐いて腕を拱み。

「殺生なこと爲されました。」

と、周庵を怨めしく思ふた。

「それで謝罪に罷出た次第、貴下からも佛に宜敷仰有つて下され、それと儀助どのには、極内密にお願ひ申す。」

と、辭誼も粗忽々々に歸つて去た。

九三

藤九郎が吹田の別莊を訪ふたのは、お米が井戸に身を投げた晩から五日めで、尋ねるお國は葬式の爲に大阪へ歸つて別莊には居なかつた、別莊守の話してお米の死んだ理由も判り、別段お國に會はねばならぬ必要も無いので、その儘山崎へ歸つて來た。

もふ一町許りで宅と思ふ所まで來て、山崎街道の往還から遙かに宅を見ると、白い物を持った人が出たり入つたりして、何だか騒々しく見えるので、心元なく思ひつゝ急歩に歸つて來ると、先日來た名主やら組頭が紋付の羽折を着て、村の男に立混つて何彼と世話をして居る、臺所を見ると、近所の女房連が五六人集つて、釜の下をドン／＼燃して何やら煮物をして居るらしい、何事ならむと心に懸けつゝ宅に入ると、小供を抱いたおさんが駆寄り。



「もし、大變な事が起りました。」

「大變とは何事ぢやリ。」

「甚兵衛どのが、代官所で首を縊つて死にました。」

「ゑ！ツ。」

と、藤九郎は愕いて、草鞋の紐を解くや解かずや佛間に通ると、筵の上に甚兵衛が冷くなつて横たはつて居る。

藤九郎は二度吃驚。

「こりや如何爲やう、ま、何と致さう。」

と、呆れてゐる。

馳集まつた名主組頭は死骸を取捲き、名主は進むで。

「飛んだことになりました、嗚御力落しでござりませう。」

「皆さまから歎願書も出ましたゆゑ、無事で歸れることと存じて居りましたが、斯

ういふ姿で歸らうとは、思ひも寄らぬ儀でござる。」

と、膳九郎は當惑の體。

「御才でござりまする、わたし達も歎願書に免じて、御放免になることと思ふて居りましたに、案外な成行で何とも御挨拶も出来かねまする。」

「日頃正直一圖の御仁でござつたゆゑ、賈金使ひの嫌疑を受けたのを残念がつて、斯ういふ最後を遂げたものでござらう。」

「皆も然ういふて、氣の毒がつて居りまする。」

「何時の最後を遂げたものか、御承知はござらぬか。」

「代官所での話しを聴きますと、昨夜の夜半に縊つたらしうござりまする。」

「ふーん、不慥なことを致した。」

おさんは番茶を汲むで来て。

「皆さまお映りなされませ。」



と、薦めて置いて藤九郎に向ひ。

「吹田の方へ飛脚を出しましたが、お國さんは居られませうな。」

「否、お國さんは居らぬ、大阪に歸つた後ぢや。」

「へ、お國さんは吹田に居ませぬかえ。」

「大阪の方も大混雑、通知をしても來らるれば可いが、併し親子一生の別れぢや、來られても來られいでも、通知だけは爲にやならぬ。」

葬式は明日の夕方と定めて、更に船場の尾張屋の番頭幸七宛に、夜通しの飛脚を出した。

おさんは毎晩出て來る子供の母のことが氣に懸るので、吹田の模様を聴かうとしても、出入の人が絶えぬため問ふことも出來ず、その夜は殆んど夜明しであつたら、子供の母も出ず、夜が明けて村の人が寄集まつて、葬式の準備をして居る午後、お國が一人で通し駕籠で駆付けた、丁度その日はお米の初七日の逮夜に當るの

で、幸七は來られなかつた。

その日の暮方、野邊送りを滞り無く済まして、藤九郎おさん、お國の三人は、村の會葬者に別れて歸つて來ると、一人の旅僧が忽然と戶外に立つた。

九四

お米の初七日の逮夜でもあり、甚兵衛を葬つたばかりの所であるから、お國は、それと見るや、旅僧を請じ入れて回向を頼み、藤九郎おさんも快く、精進料理で夕餉を薦めなどして、叮嚀に旅僧を款待つた。

圍爐裡を中にして、藤九郎と向合つて坐つて居る旅僧は、櫛の明りで藤九郎の顔を凝々と觀て居たが、眉根に皺を寄せて暫らく冥想してから、靜かに兩眼を開き。

『さて、甚だ卒爾な事を伺ふやうでござるが、今宵の新佛は、身を投げたとか、首を縊つたとか、何れにしても非業の自殺を遂げられたでござらう。』